

笑顔 (すまいる。)

くさざんかの咲く頃に

原案 中村政仁

脚本 森下知香

登場人物

- 吉村アキ (60) たまやの女主人。
- 吉村修二 (29) アキの次男。
- 吉村孝一 アキの長男。店を継ぐはずだったが、十年前、25歳の時、事故死。
劇中ではアキの心の中の幻影として登場。
- 吉村いづみ (25) アキの次女。
- 大門助六 (31) たまやの隣のクリーニング屋の息子で、このうちの下宿人。
- 入沢里子 (40) アキの長女。
- 入沢武弘 (45) 里子の夫。
- 大門たか子 (58) 助六の母。夫とクリーニング屋を営む。アキの友人で家族同様の仲。
- 為永 浩 (35) 亡くなった孝一の同級生で、店の常連客。近所に住んでいる。
- 神林裕子 (30) 女医。店の客。
- 峰岸 保 (62) 東京の資産家。店の客。
- 小泉和也 (27) いづみの恋人。

藤村勇一

(30) 峰岸の秘書。

斉藤翠

みどり

(28) OL。観光客。

三枝由希美

ゆきみ

(24) OL。観光客。

入沢花音

かのん

(8) 里子と武弘の娘。アキの孫。(ダブルキャスト)

吉村勇一

(67) アキの夫。たまやの二代目。二十年前に失踪。劇中には登場しない。

創業百余年、埼玉県加須市（かぞし）・不動ヶ岡不動尊近くにある、うどん屋「たまや」。庶民的で昔なつかしい、田舎うどんのお店。

舞台はうどん屋の店内。使い込まれた木のテーブルが、一セット置かれている。舞台正面にはカウンター。奥には厨房があり、そこで働く人たちの様子がなんとなく見える。下手に店の出入り口である引き戸。上手には小上がり。その手前には、二階に通じる入口がある。一階は店舗。その奥に居間、洗面室、風呂、トイレなどがあり、二階にはそれぞれの寝室がある。店の壁には、山茶花の写真が飾ってある。

プロローグ

この物語のテーマ曲とともに客電が落ちていく。暗くなると、舞台上スクリーンに、約三分間、登場人物たちの日常風景をにぎやかに描いた動画が映し出される。古き良き昭和のホームドラマのような懐かしいオープニングである。

映像が終わり、やがて、舞台上に夜の明かりがともる。二〇一七年四月九日、

日曜日、夜九時頃。遅めの夕食を取る一組の客が、小上がりに座っている。二十代のOLといった様子。カウンターには、この店の女主人、吉村アキ。店内には、アキの次男修二、次女いづみがいる。帰りかける客の声が、舞台下手奥から聞こえる。「ごちそうさん！」

修二　ありがとうございます。

みどり　すみません。（お銚子を示し）もう一本ください。

アキ　はい。…いづみ。（目で促す）

みどり　こちら辺も、だいぶ変わりましたね。

アキ　前にも、このあたりに来たことあるの？

ゆきみ　私は初めてです！友達に誘われて…（隣の子を指して）

みどり　私は二回目。

修二　山登りですか？

みどり　はい。休みのたんびに、日帰りであつちこつちの山、登るのが趣味なんです。

修二　へ～

みどり　まえに、弥勒山に来たときは、このお店に気が付かなかったんですけど、その

あと、「たべなび」で見て。ここ、すごく評判が良かったんで…それで、友達誘って、久しぶりに来たんです。

修二
そうだったんですね。

みどり
やっぱり来てよかった。ね？

ゆきみ
うん！念願の「たまやさん」に来られたし！

アキ
そう…で、うどんのお味はどうだった？

ゆきみ
はい！とっても美味しかったです！特に、舞茸うどん。

アキ
そりゃよかった。

いづみ
（熱爛を席に持っていく。）

みどり
（いづみに）あ、どうもありがとうございます。

ゆきみ
わう。（楽しい様子）

みどり
あれ？ゆきみ、やっと元気で来たんじゃない？

ゆきみ
え、そうかな…

みどり
うん、さっきまで、歩きながら、ため息ばっかついてたよ。

アキ
あら、あんたは山登るのきらいなのかい？

ゆきみ
あ！そういうわけじゃないんですけど…

みどり
フフフ…ちよつとね。

ゆきみ
まーね。…言っちゃおつかない。実は私、職場でいろいろあつて…もうなにもか

もやめたくなっちゃつて！………そしたら、みどりさんが、「だったら、山いこつ！」
つて誘つてくれて………それできたんです。

みどり
私、嫌なことがあると、山に来るんですよ。こうやつて、もくもくと自然の中

歩いてると、イライラがふきとんじやう！

いづみ
へへ。こんな、なんにもないとこ、面白くもなんともないじゃん。

みどり
そのなんにもないのがいいんです。

修二
あ、それわかります。頭の中がからっぽになつて、すつきりしますよね。

みどり
そう！そうなんですよ！それで、ゆきみ、誘つただけど。今日一日ぼんやり

してて、いつものこの子と全然違ふんですよ。山に誘つたの失敗だったのかな、
つて思つたら…

ゆきみ
うん、さつきまでは、正直、全然ふつきれなかつたんだ。あの…バカみたいな

話なんですけど、私、会社入ったときからずっと好きだった人がいて、…なに
やつても気が合うし、で、すっかり意気投合しちゃつて…。付き合うようにな
つたのはいいんだけど、実は彼、奥さんがいたんですよ。要は不倫ですよ。

その時、すぐ別れよう、って思ったんだけど、…だめなんですよね、やつぱり。そのままずるずる二年。もうずつとこのままでもいいや、って思い始めたころ、会社にばれちゃって。

みどり　　ずるいんですよ、そいつ。全部、ゆきみのせいにされたんですって。

ゆきみ　　でも、おかげで目が覚めた。こんな人信じたあたしって、なんてばかなんだろ、って思った。もう最悪。自分がいやになっちゃった。

アキ　　そう。それからどうしたの。

ゆきみ　　はい、すつぱり別れました。あくせいせいした！今度はもつといい恋するぞく！（とか？笑）…あれ、あたしったら、なに話してるんだろ、おかしいですよね？初めて入ったお店なのに…なんか不思議…

みどり　　このお店の雰囲気かな…落ち着くっていうか、あつたかいです。やつぱり、ここにきてよかった。

ゆきみ　　おいしいうどん食べてたら、じんわり心にしみてきた(笑)

アキ　　そりゃよかった。(いづみに目で合図して、漬物を出すよう、無言で伝える)

みどり　　食いしん坊だもんね！

ゆきみ　　それだけじゃないってば！…だけど、美味しかったんだもん。

アキ　そう。気に入ってもらえてよかったよ。

みどり　ありがとうございます。話、聞いてくださって。

ゆきみ　なんで、みどりさんがお礼言うの？

みどり　いいじゃない。うれしかったの、あんたが元気になって。

いづみ　どうぞ…サービス（きゅうりの漬物を席に持っていく）

みどり　え？いいんですか。

いづみ　（アキの方をさして、店主からのサービスだという仕草）

ゆきみ　（アキにむかって）わーありがとうございます！（みどりとゆきみ、二人でわ

いわいと盛りあがる）

修二　仲いいんですね。

みどり　まあ、手のかかる妹みたいなもんです。

ゆきみ　はいはい、感謝してます。（笑）

みどり　あくほつとした。いいなあ、この店。（店を見回し、壁の写真に気づいて）わあ

…この写真素敵ですね…　なんていう花ですか？

アキ　これはね…山茶花（さざんか）っていうんだよ。うちの道楽亭主が昔撮った写

真だよ…昔の話だけどね…

ゆきみ

へえ、道楽亭主？ そうなんですか？（笑）

その時、二階から助六が下りてきて、アキにわからないように、なにやら合図を送る。それを見て、いづみが助六にうなずき、修二にそつと手振りで知らせる。

修二

（唐突に）そういうえば、母さん、今日、姉さんたちがなんか話があるって言うてたね。

いづみ

（ややわざとらしく）うん、九時過ぎに店に来るって言うてたかな。

みどり

あ！もうこんな時間！…ごめんさい、つい…

アキ

いや、気にせずゆつくりしてっつていいんだよ。

みどり

お勘定お願いします。

修二

はい。

その時、奥の電話が鳴る。いづみがでる。

いづみ
アキ
はい、たまやです…はい…はい、かあさん、武弘さんから…、代わってつて。
ふーん、なんだろうね…（奥に引つ込む）

そのとたん、そろそろと玄関が開いて、忍び足でたか子が入ってくる。続いて花音、そして里子。お客がいるのを確認して、すぐそとへ。いづみは、奥をうかがっている。また、下手前スポットの中で武弘が携帯でアキと電話をしている様子。電話している武弘に里子が、「もう少し電話を引きのばして」と手振りで報せる

たか子
（ひそひそ声で）こんばんは…しゅうちゃん、…大丈夫？

修二
はい。

花音
おばあちゃんは？

いづみ
今電話に出てる。

みどり
どうしたんですか？

たか子
あら、お客さん？ごめんなさい。

いづみ
（みどりたちの耳元で何やらささやく）

ゆきみ　へー、わーいいなあ！

修二　よかったら、一緒にどうぞ！

たか子　そうそう、参加しちゃいな。

みどり　いいんですか！

修二　（外に向かつて）里姉、例のものは？

里子　ばっちり！

助六　（奥をうかがって戻ってきて）ほら、もう電話終わりそうだよ！

里子　じゃ、はじめようか！…電気消して。

助六　うん。（電気を消す）

アキが戻ってくると、店内は真っ暗。

アキ　あれ？どうしたんだい？

全員　…（まるで誰もいないかのように息をひそめている）

アキ　誰もいないのかい？

里子　せーの！

里子がろうそくのともった大きなケーキを抱えて、店に入ってくる。

武弘は、ビデオカメラを構えている。「ハッピーバースデー」と、みんながバースデーソングを歌う。

花音　おばあちゃん、お誕生日おめでとう！（アキにプレゼントを渡す）

アキ以外の全員　アキさん（母さん、おばあちゃんなど）お誕生日おめでとう！（等、

口々に祝いの言葉。）

アキ　なんだよもう…別にめでたくなんかないよ。（照れ隠し）

助六　いいからいいから、ほら吹き消して、おばあちゃん。

アキ、照れくさそうにろうそくの火を吹き消す。笑いや拍手、にぎやかなざわめきの中、曲がかぶさり、暗転していく。

第一場

翌日。早朝、開店前の店内。すずめのさえずりが聞こえる。

いづみが、ただらとした様子でテーブルを拭き、開店準備をしている。

修二は店先を履いている。前を通り過ぎる人々に挨拶をしている様子。

修二

あ、おはようございます！…はい、いってらっしゃい！

修二の姉の夫、入沢武弘が、いかにもサラリーマン風のジョギング姿で客席通路より走ってくる。

武弘

おう、修二君。

修二

あ、お義兄さん、おはようございます！

武弘

おはよう。

修二

朝のジョギングですが？ 昨夜結構飲んだのに…

武弘

うん、まあね。

修二

あ、どうぞ…（店にうながす）

武弘 いやあ、ちよつと二日酔いだけどね。走らないと、すぐなまっちゃうから。修

二君、今度一緒にどう？

修二 いや、俺は…

武弘 身体にいいよ。…ふう、悪いけど、お水いっぱいくれる？（店の中入つても、軽く体を動かしている）

修二 はい。いづみ、お水持つて来て。

いづみ なんであたしがよ？…あくたりい…（ぶつくさいながら厨房へ）

武弘 （奥に）ごめんね、いづみちゃん。ね、いづみちゃんはどうか？ジョギング？

いづみ 大嫌い。

武弘 …（リアクション）

修二 いづみ…

武弘 （修二に）いいんだよ、修二君。…若い子ははつきりしてるね。…（苦笑い）修

二君、昨夜はごちそうさま。いやー楽しかったね。お義母さんもあんなに喜んでくれて…お先に失礼しちやうって悪かったね。夜中にあとかたづけ大変だったでしょ？

修二 いえ、大丈夫です。

武弘

いや〜でも、お義母さんが喜んでくれて本当によかった…（いづみが持つてきたコップを受け取り）あー、いづみちゃん、サンキュー！（一口飲んで顔をしかめるなど）

修二

どうしたんですか？

いづみ

（くすくす笑い）辛味大根の汁、わさび入り！二日酔いに効くっしょ？

修二

こら、いづみ！

武弘

いいよいいよ、修二君。気にしないで。いづみちゃんごめんね、ありがとう。

修二

お義兄さん、これどうぞ。（浴蔵庫から出してきたポカリのペットボトルを渡す）

武弘

おー、ありがとう！

下宿人、大門助六が、寝間着のような部屋着で、二階から降りてくる。

助六

おはよ〜つす。あら、武さんも！

武弘

おう助六君、早起きだね〜。

助六

いやあ、逆ですよ、寝てない。もう司法試験まで追い込みだからね。今年こそは受かんない！

武弘 お、気合入ってるね！

いづみ その分、昼間寝てるけど。

助六 いづみちゃん。

武弘 なんだ、そうなの？（笑）

助六 いや、ま、夜の方が勉強がはかどるっていうか…。

武弘 まあ、その気持ちはわかるよ。僕も受験生の時はそうだったからね。助六君、早く弁護士さんになって、いろいろ相談に乗ってよ。

助六 任しといてください！

いづみ 助六が弁護士？？ありえない。

修二 いづみ！

武弘 まあまあ…あれ？そういえば、お義母さんは？（アキがないことに気づき）

助六 あ、ほんとだ！いない。

修二 うん…、今日は珍しくまだ寝てる。

武弘 昨夜、遅くまで起きてたからね。疲れさせて悪かったかな。

修二 いえ、そんなことないですよ。でも、もうちよつとそつとしておこうと思って。

助六 それがいいよ。おばちゃん、ほかの人が起きてると、絶対先に寝ないで最後まで

で、あれこれ働いてるんだから。

武弘

そういえば、最近、お義母さん、少し顔色悪いような気がするね。修二君、一度、健康診断にでも行ってもらった方がいいんじゃないかな。いくら丈夫だと言つても、お義母さんもう六十だからね。…でも、昨夜は本当に楽しそうだった。あんなにはしゃいでお義母さん見たの、僕は初めてかもしれない…あ、そうだ、昨夜撮った写真、早速、家でプリントしてきたからね。

修二

あ、すいません。

助六

まめだねく武さん。

そこにアキが、仕事着で降りてくる。

アキ

朝っぱらから騒がしいね。

武弘

あ、お義母さん、おはようございます。

助六

おばちゃん、今朝は遅かったね。

アキ

うん…なんだかね、ちよつと体が重いんだよ。

助六

それは飲みすぎ食べ過ぎ(笑)

アキ あたしはそんなに食べてないよ。

武弘 朝からすみません。

修二 母さん、お義兄さんが、昨夜の写真持ってきてくれたんだよ。

アキ ゆうべの？

武弘 はい、お義母さん、本当に楽しそうだったんで、いい写真いっぱい撮れました。

それで早くお見せしたくて、ジヨギングついでに寄っちやいました。

助六 (写真を見て) わーおばちゃん変な顔。

武弘 いやーこういう自然な表情がいいんですよ。最近、僕、ポートレートっていう

か、人物の写真に、凝ってましてね。

いづみ よく見たら、なんか、花音の写真だらけじゃね？

修二 それはしょうがないよ。

助六 かわいい盛りだもんね！

みんなで写真を見ながら盛り上がっている。

アキひとり、なぜかぼかんとしている。

アキ　　なんで、そんなにみんなが集まってるんだい。

助六　　そりゃ、おばちゃんの誕生日だもん。なーんて、それにかこつけて、騒ぎたかっただけだったりして。

いづみ　　出た、それが助六の本音か。

助六　　俺だけじゃないでしょ、ね〜武さん。

武弘　　助六君、冗談きついな〜お義母さん、そんなことないですよ！

修二　　いいかげんにしろよ。(アキに) ほら、昨夜のお誕生会の写真だよ、母さん。

アキ　　…誕生会って誰の？

助六　　おばちゃんのに決まってるでしょ？

アキ　　???

いづみ　　ぼけてんじゃね？

アキ　　あたしの誕生日？

一瞬間

武弘　　…いや…だからですね…(修二に) お義母さん、気を悪くされちゃったかなあ

：

アキの長女で修二たちの姉、入沢里子が急ぎ足でやってくる。

里子

母さん、うちの武、来て：（入ってきて）いた！やっぱりここだ。いつまで油売ってるの、会社遅れるじゃない。ちよっとジョギングしてくるって言ったつきり、帰ってこないんだから：もー。

武弘

お、もうこんな時間か！ いやけどな、今、お義母さんに写真見せて昨夜の話したら：

助六

なんか変なんだよ、おばちゃん。

里子

へん？なにが？

助六

おばちゃん、誰の誕生日？なんていうんだよ。昨日の話だよ？覚えてないなん：

アキ

（助六がいいかけるところをさえぎって）覚えてないわけないだろ？

助六

え？

アキ

昨日の誕生会、楽しかったよ、みんなありがとうよ。

里子　　なんだ〜母さん、かついでたの。やだあもー（笑）…母さんが冗談言うなんて珍

しい。

修二　　あーびつくりした。

武弘　　いや〜、ドキッとしました。

助六　　だまされた〜。やるね！おばちゃん。

いづみ　　雪でも降るんじゃないね。

アキ　　あたしだって、やるときはやるんだよ。

里子　　そんなに昨日楽しかったの？あ、まだお酒が残ってたりして！

などなど、みな口々に言って、ひとしきり大笑い。

アキは、なんとなくあいまいに笑っているが、やや不自然な様子。

写真を見て人数を数える。

アキ　　…一人たりないね。

修二　　え？

武弘　　いや…そんなことはありませんよ。そういうことは気を付けて、なるべくまんべ

んなく撮りましたからね。

修二

母さん、里姉、いづみ、六やん、義兄さん、たか子おばちゃん、に…花音ちゃんに、俺…全員いるよ。

アキ

そうだ！孝一がいない。なんで孝一がどこにも写っていないんだよ。孝一は？アキ以外の人々、凍り付く。

一瞬ののち、いづみが、いきなり奥に行ってしまう。

助六

いづみちゃん！…

里子

母さん…そりや、孝は、^{こゝ}いつでも、ずーっと母さんのそばにいますと思うよ。

でも、朝からその話は…やめようよ。みんなつらくなるから。

アキ

(はっと気づき) ああ…そうだね…

里子と武弘の娘、花音(小学生)が、ランドセルを背負って入ってくる。

花音　パパ！ママ！何やってんの！かのん、もう学校行くよ！

里子　うわくもう8時?! いっけない、じゃ、母さんまたね！

武弘　どうもすいません…修二君、お騒がせして…

花音　パパ早く! …じゃね! おばーちゃん、いつてきまーす!

アキ　はい、行つといで。

三人あたふたと去っていく。

アキ　(気まずさをぐまかすように) はは…なにやってんだか、あの夫婦は。娘の方が

よっほどしつかりしてるじゃないか。しょうがない親だね。(修二に向かって

そっけなく) …さあ、そろそろ店開けるよ。(と、厨房へ入っていく)

助六　(修二に) おばちゃん…やっぱりコウ兄のこと忘れられないんだね。…あれから、

十年かあ…

…。(奥に) 母さん、もう暖簾出している?

アキ　ああ…。

修二　(表に出ていく)

助六

(その様子をちよつと見送り、ため息) さあてと、もうひと頑張りすつか! (二階に上がっていく)

玄関の方で若い女性の声が聞こえる。

裕子

あの…もうやっていらっしやるんですか?

修二

あ、はい、もう開いてますよ、どうぞ。

神林裕子が入ってくる。

裕子

(店に入りながら) こんなに早くからやってらっしやるんですね。

修二

はい…あ、こちらへどうぞ(テーブル席へ促す) このへんは、お不動さんに朝からお参りしたり、弥勒山に登るついでに食べに来るようなお客さんもいますから。…観光ですか…?

裕子

いえ、私は仕事で…最近、この町に越してきたんです。

アキ

(厨房から出てきて) いらっしやい。

裕子 あ、(軽く会釈など。メニューを見る)

修二 (お水を出す)

浩 アキちゃん、おっは〜！(オフで)

近所の住人で、この店の常連客。為永浩が入ってくる。

修二 いらっしやいませ。

アキ 浩、今日は早いね。

浩 (入ってきて) いや〜きのう、徹夜の工事でさ、さつき終わったところ。あー疲れた疲れた…(カウンター席に座りかけて、裕子に気づく) …あ、どうも…(裕子に)。修二、修二？(だれ？と修二に目で聞く)

修二 (お水出す) いや〜(首をかしげ)

浩 あ、どーも〜、お嬢さん、観光…じゃあないですよね？ このあたりは初めてですか？ えー私は、為永浩、といひまして…

修二 浩さん。…あの、すいません(裕子に)

浩 わかっている、わかっているって…

アキ 浩、ほら、何にするかい？

浩 そーだな…、あのく、お嬢さん、なにを召し上がるんで？

裕子 …じゃあ、きつねうどん。

浩 (くいぎみで) あきちゅあん、けつねうどん、ふたつちゅ！

アキ あいよ。

浩 (裕子に) この人のうどんね、最高なんすよ。

裕子 はい、実は職場でも評判だったので、一度来てみようかと思つてたんです、「た

まや」さん。

修二 そうだったんですか。

アキ 職場つてこの近く？

裕子 はい、私、四月から、その先の遠藤病院に勤めることになったんです。

浩 つてことは、女医さん？どうりで、頭よさそうだと思つた。

裕子 そんなことないですよ。

アキ この子はね、うちの長男の同級生で、一緒に野球やつてた仲でね。子供の頃

から、よくうちにも遊びに来てたんだよ。もうばかだねく

浩 そうなんだよ、これがばかで…ちよつと！アキちゃん！

アキ
裕子
いつもこれだからね〜(笑)〜ったくもう。なれなれしくて、悪いね。
いえ…。

この辺りで、いづみ、二階から降りてきて、店内に出てくる。

浩
修二
これでも、俺ね、高校、野球部で、一応、甲子園行ったんすよ！ こいつの兄貴と一緒に！こいつの兄貴ね、一年の時からピッチャーで四番、もうプロのスカウトは来るわ、とにかくすごかったんだから！ んでおれはサードで。その頃は、女の子がキャーキャー言っついてきて〜なく(修二に)。
ですね。

浩
修二
ま、おもにモテたのは、こいつの兄貴の方だけど…。ああいうやつが、そばに
いると、ほんと苦労するよなく修二。

修二
：

いづみ
(浩に) あいかわらず、綺麗な人見るとでれでれしちゃってき、うぎ！

浩
お〜いづみ！ ちょっと見ねえうちに、胸でかくなつてねえか？

いづみ
だから、そういうとこ、きもいってば！

修二　　こら…いづみ。

いづみ　だからモテないんだよね〜

修二　　うるせえな！

アキ　　いいかげんにしな。はい、あがったよ（うどんが出来上がる）

修二　　はい（二人分、それぞれ運ぶ）きつねうどん、お待たせしました。

裕子　　わ、美味しそう…

浩　　でしょ！　アキちゃんのうどんはね、この町だけじゃ…

アキ　　（さえぎって）ほら、浩。おしゃべりはいいから。のびるよ。

浩　　わかってるよ！　あ、よかったら、一緒に食べますか？

裕子　　（苦笑い）はい。

浩　　（アドリブ、じゃ、食べましょうか…といった内容。裕子のテーブルに移動し、

一緒に食べ始める）どう？

裕子　　おいしい…

浩　　だしよく！！！！　アキちゃん、最高！　これはね、俺のソウルフードなんだよ、

なあ修二！

修二　　はい、ほぼ毎日来ますもんね、浩さん。

アキ …この子はね、うちの長男の同級生で、一緒に野球やってた仲間なんだよ。子供

の頃から、よくうちにも遊びに来てたんだけど。もうばかでねえ

浩 そうなんだよ、これがほんとはばかで、って……アキちゅわん！、それさつきも
言った。

アキ え？…そうかい？

浩 ちよつと、アキちやくん…

アキ ははは…悪かったね。

浩 まあいいけどさ。それで、お嬢さん、こんな朝早くからうどん食べに来るな
んて。さてはよほどのうどん好き？

裕子 あ、そういうわけじゃないんですけど、ちよつとこのご近所のお年寄りのこと
で、昨日遅くなってしまつて…。

浩 どうしたの？

裕子 実は、この地区の方から、隣の一人暮らしのお年寄りの姿が一日前から見えな
い、ってご相談があつて。

アキ ああ…もしかして、この角曲がつたどこの、えくとほら…えくと…（名前が出
てこない）

修二 山岡さん？

アキ そうだよ。

裕子 ええ、山岡さんです。ご存知なんですか？

浩 あ、山岡のばあちゃんか！あのばあちゃん、もう八十二〜三になるけど、ほん

と達者でさあ、つい何年前までは、町内会の寄り合いでもなんでも、張り切
って仕切ってたんだけど…二年くらい前から、だんだん様子がおかしくなっ
ちやつて、夜中に一人で外をうろついたり、近所の人捕まえて「泥棒だ」なんて
いったりで。みんな、心配してたんだよ。それで、どうなったの？

裕子 はい、明け方、ようやく見つかって、今は息子さんと病院に…。

修二 ずっと一晩捜し歩いてたんですか？ それじゃ大変でしたね。

アキ で、おばあちゃん、けがはなかったのかい？

裕子 はい。

浩 よかった〜！

いづみ （アキの手元をみて）ねえ？なにやってんの？

アキ え？（また、うどんを茹でている）

いづみ なんてうどん茹でてんだよ。

アキ 決まってるんだろ、今、浩たちにきつねうどん作ってたんだから。

いづみ なにいつてんだよ、もう二人とも食べてるじゃん。

アキ あ！

裕子 …大丈夫ですか？

いづみ ぼけすぎだろ？

浩 おく！いよいよアキちゃんも、そういうお年頃かあ。

アキ …おかしいね…。

修二 母さん、昨日の疲れがまだ残ってるんじゃない？

浩 昨日？どしたの？

修二 昨日、母さんの誕生日やって、夜中の十二時過ぎまでみんなで飲んでたんです。

浩 なんだよそれ！ アキちゃん、俺も呼んでほしかったな。

アキ なにいつてんだよ、お前は徹夜仕事だったんだろ。これしきのこと、ぼんやりするなんて、あたしもやきがまわったかね。

浩 そうそう、俺の悪口言うから、罰が当たったんだよ、アキお・ば・あちゃん！

アキ そういうこと言っていると、お前がそこで小便もらした話をするかね…

浩 あく〜ストップ！！アキちゃん、それはだめ！

いづみ

そうそう、浩、中二の時、スカートめくりしたら、その女子にすっげえパンチくりだされて…（もっと面白いエピソードがあったら入れてください）
わ〜いづみ！いや、いづみさん！ その話は勘弁して〜！

浩

一同笑いの中、暗転していく。

第二場

その日の午後。お昼のかき入れ時が終わって、静かになった店内。

アキが健康雑誌を広げて、読んでいる。

アキ

（読む）えーと、「高血圧、アトピーが大改善、老眼、白内障、白髪、にも効く。肝機能も向上する『酢ニンジン』？」 ははは…ばかばかしいね…（さらにめくる）「若年性認知症は、六十四歳以下で発病する」…へえ…「同じことを何度も聞く、今していたことをすぐに忘れる、集中力が落ちて今まで普通にやっていた仕事にひどく時間がかかる」…ふうん…（自分に思い当たることがあ

り、ちよつと考え込んでしまふ)

アキがふと目を上げると、そこにアキの長男、吉村孝一がいる。だが、孝一は十年前に事故で死亡していてこの世にはいない。ここにいるのはアキの心の中の幻影である。

アキ
孝一！

孝一
久しぶりだね、母さん。元気？

アキ
もう六十だ、元気なわけないよ。ははは…(明るく) お前がいないと本当に不便だよ。あの子たちじゃ頼りにならないし。

孝一
不便？ひつでえな…(笑)

アキ
おまえは変わらないね…。

孝一
修二どうしてる？

アキ
あの子はね、もう二十九だつてのに、好きな女もないで、うどんばかりこねくり回してて。そのくせいつまでたつても、腕はさつぱりなんだから。

孝一
そっか…いづみは？

アキ

それがね、高校もろくに行かないでやめちまったかと思うと…今度は、うちの仕事手伝い始めて。やっと落ち着くかと思ったら、フラフラ遊び歩いてばかりだよ…。母さんの育て方が悪かったのかね。

孝一

そんなことねえよ。二人とも、ちゃんとやってるよ。

アキ

孝一、お前がそばにいてくれたらね…。ばかだね。なんで事故なんかおこすんだよ。お前、運動得意だったろ？ ……なんで、あの日出前になんか行かせたんだろうね。母さんが代わりに行けばよかった。

孝一

…ごめんね、母さん。(間) ちょうど十年前か。早いなあ。あの日、雨が上がったばかりで道路が濡れてたし、対向車線から突っ込んできたトラックが酔っぱらい運転だったからね。運が悪かったんだよ、俺は。それだけ。

アキ

やつとうどん打ちも覚えて、やつてくれるようになった矢先だったよ。さんざん苦労して覚えたのに、本当に運がない子だね、お前は。

孝一

母さん、うどんのこととなると鬼みたいに厳しかったからね(笑) あの頃だつて、「まだまだだ。お前のうどんなんか、父さんの足元にも及ばない」って、よく怒られたじゃない。でも俺さ、父さんのうどんより母さんの打ったうどんの方が好きだったよ。優しくて旨かった。

アキ 二十年前、父さんがいなくなつてからは、母さんが全部やるしかなかったから、必死でなんでもやつてただけだよ…でも、お前が手伝つてくれるようになって、母さんどんなにうれしかったか。

孝一 今は、修二といづみがいるだろ。俺だつて、ずっと母さんのそばにいるよ。

アキ …そうだね…ねえ孝一、母さんは幸せもんだね。…ただ…さ、最近物忘れが激しくなつて、…年かね。

孝一 (ちやかして) 年だね。

アキ なんだよ、もう(笑)

明るく思い出話を語り合う二人。

修二が出前から帰ってくる。

修二 (入ってきて) ただいま。

アキ (はっとして) …おかえり。

修二 …今、誰かお客さんいた？なんだか声が聞こえて…

アキの意識が現実に戻ったとたん、孝一の姿は見えなくなる。

舞台上の「孝一の幻影」は、アキと修二のことを見守りながら、少しずつ去っていく。

アキ お客がいるわけないだろ。さつき、昼が終わって、暖簾下げたところじゃないか。

修二 そつか、なんか今、そこに誰かいて、母さんと話してたような気がしたもんだから……母さん、大丈夫？（テーブルの上の健康雑誌を見て）……最近顔色が悪いよ。……一度さあ、病院に見てもらった方がいいんじゃないかな。

アキ なんで？別にどこも悪くないよ。

修二 うん……だけど、万一つてこともあるしさ。今朝、お義兄さんにもそう言われて。

アキ 武弘さんは、心配性なんだよ。ここんとこ、少し寝不足なだけだよ。

修二 だって、母さん、役所の健康診断も全然いかないじゃないか。

アキ 大丈夫だっていってるだろ。

ガラガラと玄関を開ける音。隣人でアキの友達で助六の母、たか子と助六が言

い合いをしながら、どやどやと入ってくる。

たか子 アキさん！ちよつといい？

助六 母ちゃん、もうやめやめ！

たか子 話はこれからでしょ！ロク！ごまかそうたつてそうはいかないわよ…ねえ、

アキさん、ちよつと聞いてよ！

アキ どうしたんだよ？ あんた、そんな興奮して…

助六 興奮すると、しわ増えるよ。

たか子 うるさい！誰のせいだしわが増えてると思つてんの…今日という今日は、勘弁できない！（アキに）助六がね、本家のおじいちゃんの四十九日、出られないつていうのよ。勉強が忙しいからつて！

助六 しょうがないでしょ、今追い込みなんだつて…

たか子 今更追いこんだつて、大して変わんないよ！だいたいね、二十五過ぎて、いきなり法律の勉強始めたつて、弁護士になれるわけじゃないの。せつかく就職した農協もあつさりやめちやつて、弁護士になるつて。…そう言つてからもう何年たつたと思つてんの。

助六 五年。

たか子 聞いてない！知ってるわよ！

助六 だって、何年？っていうから…

たか子 ねえ、あんた三十一にもなって…いつまで弁護士試験なんてくだらないことやってる気なの？

助六 くだらないってことないでしょ。それから、弁護士試験じゃなくて、司法試験。

たか子 そんなもん、どっちだっていいわよ！もともと、たいして頭よくないくせして

…

助六 そりゃ母ちゃんの息子だから…

たか子 ……くーお前はああいえばこういう…もく、どういう…

アキ (美味しそうないなりずしを二個とお茶を持ってくる) おたかさん、はい。う

ちの自慢のお稲荷だよ。さ、…座って…ほら。(たか子が言おうとするのを止めて) いいから食べな。さあ。あたしがおごるから。

たか子 (いなりずしを一口) うん…

アキ (たか子に) 少し落ち着いたかい？

たか子 うん…これ、相変わらずおいしいわね。

アキ だろ？…そんな頭ごなしにポンポン言っちゃ、助六だって、立つ瀬がないよ。

ちよつとは、子供の話も聞いてやんなきゃ。

たか子 ……そうだね。

アキ 助六、あんたもだめだよ。親に向かってそういう言い方はないだろ。あやまんな。

助六 ……

アキ さあ！

助六 ……ごめんなさい。

アキ 助六、あんたがなぜ弁護士になりたいのか、母さんや父さんにちゃんと話したの？

助六 話したってわかんないんだよ、この人…

アキ 話してないんだろ。それじゃわかるわけじゃないじゃないか。家族だって、言わなきゃわからないこともあるんだよ。弁護士になるっていうのは、お前の大事な夢なんだろ。

助六 うん……わかった、話すよ。母ちゃん、おれが、農協辞めてまで弁護士めざした
いって思ったのは……

たか子

…うん。

助六

うん…思つたのは…（真剣。話すのかと思いきや）…んん、あ、やつぱ恥ずかしい。無理！…そういうの照れるわ…

アキ

はあ？（みんな拍子抜け）

修二

…らしいよな…ろくやん。

アキ

（助六に）ちよつと助六…

たか子

（言おうとするアキを止めて）アキさん…もういいわ…もういい…聞かないわよ。…ロク！とりあえず、あと一回だけ試験受けてみな！これがラストチャンスだよ！これでだめなら、潔くあきらめて、うちのクリーニング屋、継ぐこと！いいね！

助六

おつしやー！ いーね、任しといてよ！ 今度こそ大丈夫！ 結果で勝負！

たか子

おろ、よく言つた！結果で勝負ね。今度落ちたら、あんたが、どんなに泣き喚いたつて、絶対にもう次はないから。

助六

だから泣かないつて。俺がいつ泣いたの！

アキ

ほらもうやめな！（笑）…あんたたちは、仲がいいね

たか子

アキさん…こいつは、うちにいると、さぼつてばっかりだからね。あんたに

任せるわ。もうしばらく下宿させといてよ。

アキ
あいよ。

たか子
あんまりたまやさんに迷惑かけんじやないわよ！わかった？…

助六
迷惑なんかかけてないって、ねくおばちゃん？

たか子
だったらいけど…はくあ。ごちそうさま、アキさん、また来るわ。(帰りかける)

あ、来週、うち法事なんで、その時仕出し頼むわね。

アキ
ああ、四十九日ね。はいはい、毎度。

また連絡するわ。…ロク！あんた…(また文句を言おうとする)

助六
あ！(ごまかすために一つ何か面白いネタやってぴゅーつと二階に去る)

たか子
(思わず苦笑いして) まあ、このうちにいれば安心だけどね、アキさん、よろ

しく頼むわ。

アキ
あいよ。

たか子、帰っていく、アキも店先まで送る。

このやり取りを途中からいづみが見ている。

いづみ …何が夢だ。子供の話聞け？自分はどうかんだよ。息子の夢、あきらめさせて

おいてよくいうよ。(つぶやく)

修二

……

アキ (戻ってきて) いづみ！今朝、ゴマ煎ったのお前だね。火加減が甘い。あんな
香りのない薬味、お客さんに出せないよ。

いづみ

……

アキ さ、暖簾しまつて。あたしたちもお昼にしよう。

いづみ なにいつてんの、さつきから。もうお昼食べたじゃない？それに今日ゴマ

煎ったのあたしじゃない。母さんでしょ？

アキ いづみ、いいかげんにしなさい。お昼これからにきまつてるでしょ！

いづみ だから、もう食べたって言うてんでしょ！

アキ どうしてお前はそう、あまのじゃくなの。食べてないんだから、素直に食べれ

ばいいでしょ！

いづみ もう食ったよ！

修二 (啞然としている)

アキ ほら、今朝の肉じゃがで昼ご飯するからって…さつき話してて…

いづみ

(厨房から空の鍋持ってきて、開けて見せる) ほら、これでしょ？ 母さん？

肉じゃががないでしょ？ いつでも自分だけ正しいって、偉そうな顔してるけど、母さんだって間違うこともあるってこと。わかった？ ……これ今食べたでしょ？ 思い出した？

アキ

…(はっと思い出す)

いづみ

ゴマのことだってそう。母さんがやったの！ なんでも失敗したのはあだし。どうしてそう決めつけるの？

アキ

…(思い出そうという)

修二

母さん？ (おかしいと気づく)

アキ

…(しばし混乱)

助六

(騒ぎを聞きつけて、二階から降りてくる) どうしたの？

いづみ

ちよつと出かけてくる (出ていく)

助六

あゝ、いづみちゃん！…なに？ また親子ゲンカ？ はは…ま、いいんじゃない。

おれも人のこと言えないからね。(なにも気づかずに)

アキ

(不機嫌な様子で) ……ほつとけばいいよ、まったく二十五にもなって、口のきき方を知らないね、あの子は。…さあ、そろそろ昼ご飯にするか？

修二

……

助六

あれ？おばちゃん、お昼、さっき食べたよね？すごい食欲(笑)

アキ

…え？…(びつくりするが、修二の表情を見て、自分が間違えたことに気づき)

修二

ああ、そうだね…(とあいまいに笑って厨房に引っ込む)
(あとを追いかける)

助六

(その様子にはあまり気づかず) ねえ、おばちゃん、今週のジャンプ、もう部屋に持っつてもいい？(など言いながら、鼻歌を歌ったりして、雑誌棚で漫画をあさっている)

途中から、別空間と思われるスポットライトの中に、孝一が浮かび上がり、心配そうにその様子を見つめている。暗転。

第三場

そのあとすぐ。うちからそう離れていない近所の繁華街。

ホストかミュージシャン崩れといった身なりの男、和也が、携帯をいじりなが

らに人待ち顔に立っている。
そこにいづみがやってくる。

いづみ

和也。

和也

：（気が付く）

いづみ

遅くなつて、ごめん……

和也

どしたの？……帰ろうかと思つた。

いづみ

だから……ごめん。あのさ、和也……（言いかけてやめる）なんでもない。

和也

……機嫌悪いじゃん？なんかあつた？

いづみ

家族といると、ほんとむかつくんだよ。

和也

そんなの気にすんなよ。てきとうにしておけばいいんだよ。なあ……いづみ、今

日は時間あんの？

いづみ

うーん、五時くらいまでなら。

和也

二時間はあるな、じゃあ、どっか行こうぜ、久しぶりなんだから。（言外にラブ

ホテルに行こう、とにおわせる）

いづみ

（それに気づきながらかわして）ええ、先週もあつたよお。（和也のブレスレット

和也　に気が付き) ねえ、これ、どうしたの？新しいじゃん。誰にもらったの？

和也　そんなことないよ、これ？前から持ってたろ。なに、やいてんの？

いづみ　違うって、そんなんじゃない。

和也　俺さあ…お前と会えないと、寂しくって心折れちゃうんだ…。わかるだろ。

いづみ　ふーん、そうなの？

和也　まじだよ。ね、どっかいこうよく。パチンコいい感じで出たからさ、今日は、

(ホテル代) おごっちゃうぜ。ほら、早くいこ。

いづみ　そればつかじゃん。

和也　なに、いづみ、やなの？

いづみ　…ううん。(微笑む)

和也　じゃ行こう。でさ、(ベッドの中でゆっくり家族の話、しようぜ。

いづみ　ばーか！…ね、和也…(声を出さずに) 好き。

和也　お・れ・も。(二人、笑う。寄り添いながら去っていく)

いづみはすっかり男に参っている様子。

男は遊び人風で、ちゃらちやらしている。あまり信用できない雰囲気。

第四場

数日後（4/16 日曜）、午後。修二が、商店街で買い物して帰る途中、裕子とばつたり会う。

裕子 ああ……この前の？

修二 あ、このあいだはすみませんでした。

裕子 いえ、気にしないでください。……ちよつと、私気になつたんですけど、お母さん、今までも、たびたびああいうことありましたか？

修二 ああいうこと？

裕子 ええ、あの時みたいに、ほんの数分前にしたことを忘れてしまつたり、同じことを繰り返し言つたり、それ以外にも、たとえば、食事をした後すぐに忘れて、食べてないと言つたり……

修二 あ、最近なんですけど、確かにたまにあります。

裕子 そうですか！……ごめんなさい、いきなり。余計なお世話かと思つたんですけど、

私、あれから、とても気になってしまつて。できたら、お母さん、一度、検査受けられた方がいいと思います。

修二
検査つて？

裕子
若年性アルツハイマーの検査です。

修二
アルツハイマー？…痴ほうつてことですか？

裕子
失礼なことつてすみません。実は私、脳神経内科が専門なんです。それで…。もちろん、確実ということではないですよ。ただの可能性ですが、この病気は早期発見することが、とても大切なんです。

修二
病気？

裕子
そうです。痴ほう…いえ、「認知症」は病気です。本人や家族が、ただの物忘れだと思つている間に、進行してしまうことがよくあるんです。

修二
…

その時、浩が通りかかる。

浩
お〜！ 修二！こんなところで、綺麗なお姉さんとなにやつてんだよ！（裕子に）

裕子 あれ？この前たまやで会った、えーと、お名前なんでしたっけ？
私、名前言ってませんよ、まだ。

浩 ……ですよね？

裕子 じゃあ、失礼します。(修二に会釈して去る)

浩 あああ！ちよつと待って！お嬢さん！あの…お茶でも…(追いかけてしようとす
が、目で断られて) はい…どーも…さいなら…(がつくり) 修二く！なんで俺
たちモテねえかな？

修二 ……いや俺は関係ないすけど…(苦笑い)

第五場

それからまた数日たった頃。(FRI 金曜) 入沢家の食卓。二十二時頃。武弘と
里子が話している。

里子 様子がおかしいって？母さんの？

武弘 うん。この間、誕生会の写真持って行ったとき、ほとんど覚えてなかったって

いっただろ。

里子

あれは、機嫌が悪かったから、そういうふりしてたんじゃない？

武弘

いや、修二君の話では、最近、ご飯食べたことを忘れて、何度も食べようとして

たり、時々、自分が何をしているのかわからなくなったりするんだそう。

里子

まさか、ボケたってこと？母さん、まだ六十よ、早すぎるんじゃない。

武弘

若年性つてのもあるんだよ。

里子

そんなの信じられない。よりよって母さんみたいに、あんなにしつかりした人が、ボケたなんて…あなた、考えすぎじゃない？

武弘

そういう人ほど、多いんだそう。学校の先生とかキャリアウーマンとか。なあ、一度、病院に連れて行って、ちゃんと検査してもらった方がいいと思うな

あ。調べてみて、もしなんともなければそれでいいじゃないか。

里子

だけど、母さんが素直に病院行くなんて、ありえない。絶対嫌がるにきまつてるわよ。昔から医者嫌いで、風邪ひこうがどうしようが、意地でも行かない人

なんだから。気合で直すとか言つて。だから、母さんぼけたかもしれないから、

病院で診てもらおう、なんて言つたら、もう大変よ！

武弘

…うーん。

里子 だって、入沢のお義母さんが、痴ほうだって言われたら、あなたどうする？

武弘 痴ほうじゃなくて「認知症」っていうんだよ…。まあ…信じたくないって気持ちには、僕にもわかるよ。でも、もし本当に吉村のお義母さんが認知だったら、少しでも早くお医者さんに診てもらって、治療した方がいいんだよ。修二君とも、よく話し合って、なんとか本人を説得してみようよ。

里子 そうね…じゃあ思いきって、今度の定休日、母さんと話してみるか！自信ないなあ…母さん頑固だから。

武弘 大丈夫だよ、お母さんだって、本当は気になってるんじゃないかな。

里子 うん…でもさ、もしよ！もし、介護なんてことになったら、どうする気？あたしだって、パートもあるし…花音の学校のこともあるから、母さんの面倒見るなんて無理よ。そろそろ、花音、中学受験の準備も始めなきゃいけないし。

武弘 中学受験って、まだ花音、小学二年生だろ？そんなに早くからやるのか？
里子 だって、クラスのお友達のお母さん、みんなそう言ってるわよ。あの子だけ仲間外れにするわけにいかないでしょ？

武弘 そうか…かといって、修二君たちは店もあるし、それどこじゃないよな。困ったなあ…。実は…僕、東京に転勤って話がでてるんだよ。

里子 うっそ！本社に！やったじゃない！念願かなったわね。

武弘 そうなれば、まあ、ますますたまやは遠くなるし…それに、もし東京に来るんだったら、おふくろがこっちの家と一緒に住まないか、って、まあ…うるさいだろうな…。

里子 え！ まさか、オーケーしたんじゃないでしょうね？

武弘 するわけないよ…里子に黙って。

里子 だよね！ うくん、…あなた、長男だもんね。でも、同居はなしにしても、東京かあ。あ！ちよつと！それは困る！だって、修たちだけじゃ、母さんも店もどうにもならないわよ。今でも母さんに頼りつきりなんだから。やっぱりほつとくわけにもいかないわよね…ねえ、あなた？

武弘 え？ちよつと待ってよ！もしかして、僕に単身赴任しろって？…そういうこと？…それは…

里子 あーあ…こんな時コウが生きててくれればな

武弘 里子

わーっともめかけたところに、花音が入ってくる。

花音

うるさいっ！もう二人してそんなこと言ってたってしょうがないでしょ。まずはおばあちゃんが病院に行く。話はそれから。まったくもう（と言いつつ出ていく）

二人

（顔を見合わせて）

武弘

：だな。

里子

うん。

第六場

裕子の勤める遠藤病院の診療室。裕子と、アキ、里子、修二の三人が、MRIの画像を前に、座っている。

裕子

間違いありません。若年性アルツハイマー型認知症、初期です。このように（画像を指す）海馬の収縮がみられます。症状は記憶障害に始まり、自分がどこにいるかわからなくなる視空間認知障害。言葉が出なくなる言語障害、計算がで

きなくなる、調理や運動もできなくなるといった学習障害。やがて、食事や着替え、歩行、排泄・入浴などに支障をきたす生活機能障害などが現れてきます。重症度が増すと、家族の顔が認識できなくなり、意思疎通など難しくなります。そして最終的には寝たきりになります。また、無気力になったり、被害妄想や幻覚が出現する場合があります。暴言・暴力・徘徊・不潔行為などの問題行動が見られることもあります。

修二

：

信じられない。まだ、母さんは六十なのよ！

裕子

若年性は四十代から発症することもあります。残念ながら若いかたのほうが進行が速いんです。

修二

：治るんですよね？まだ初期なんでしょう？

裕子

薬によって進行を遅らせることはできます。ただ、完全に治るというのは…今の医学では不可能なんです。しかし、生活習慣の改善やリハビリなどによってかなり良くなる事例もあります。希望を捨てずにがんばっていきましょう。

里子・修二・いづみ ……（絶句）

アキ

つまり、もう治らないってことだね。そのうちにぼけてわけが分からなくなっ

て、みんなに迷惑をかけるってことだね。…そうだったら、先生。私を病院でも老人ホームでもどこへでも入れてください。周りの人に迷惑かけて生きていくなんて、まっぴらだよ。おまえたちもいいね。うちで面倒見ようなんて考えずに、とつと施設に入れるんだよ。

里子

母さん…そんなことできるわけないでしょ！

アキ

それか嫌なら、どっかその辺にうつちやっておいておくれ。そんな体で生きるなら、死んだほうがまだよ。

修二

母さん！

裕子

みなさん、どうか、落ち着いて…。ご家族でゆっくり話し合ってください。

周囲の明かりが消え、アキが一人スポットの中に浮かび上がる。動揺のあまり、立っていることもできず、うずくまる。

そこに、孝一の姿が浮かびあがる。

アキ

孝一…。なんなんだよこれは。なんで母さんばかりこんな目に合うんだよ。

孝一

母さん…

アキ
いままで必死に働いて、あんたたち育ててきて：母さんの何が悪いっていうのかね。

孝一
母さん、なんも悪くないよ。

アキ
じゃあ父さんのせいだよ！こんな病気になったのは、父さんのせいだよ。母さんやお前たちを置いて、女と出ていくなんて：

孝一
そんなの噂だけだろ。母さん見たの？父さんが女とでていくとこ。

アキ
孝一：。母さん、お前たちの顔もわからなくなるなんて、嫌だよ！お前たちと離れたくない！

孝一
大丈夫だよ。俺も修二もいづみも里ねえもずっと母さんもそばにいる。

アキ
だけど、母さん、何もわからなくなっちゃうんだよ！

孝一
そんなことねえよ！絶対よくなるって！先生だって、希望を捨てるな、ついてってんだろ。今の医学じゃ無理だって、がんばってればそのうちいい薬ができるかもしれないし。それまで、みんなで母さんを支える。母さん：あきらめるなんて、らしくねえよ。それに父さんだって、もしかしたらさ、借金返すために外で働いて、お金貯めてんのかもしれねえだろ。そんでいつか母さんのこと迎えに来るかもしれないねえだろ。それまで、俺たちが母さんを守る。

アキ 孝一…。

孝一 母さん、顔、ぐちゃぐちゃだよ。

アキ …なんだよ…この子はもう…（泣き笑い）

第七場

9月初旬（6/6土曜の頃）、電話の呼び出し音が鳴る。

浩が携帯で電話をかけている。

たまやの店内で呼び出し音が鳴っているが、誰もいない。

助六が二階から降りてきて電話を取る。

助六 はい、たまやです。

浩 なんだよ、助六か？ みんなどうしたんだよ。

助六 あ、浩さんか。うん、今日、花音ちゃんの運動会でさ、おばちゃんと修は、見に行ってる。いづみちゃんはわかんないけど…。

浩 お！今日は、不動小（ふどうしょう）の運動会かあ！ なつつかしいなあ。

こおら助六、なんでおまえはいつてやんねえんだよ！

行きたいけど、勉強だつて。で、どうしたの？おばちゃんに用事？

浩 いや、それがさ、今、青年部の寄り合いで、集まっただけどさ…。ほら、来
月秋祭りだろ？ いままで、手伝いの青年部連中の昼飯、毎年、たまやに出前
頼んでたんだよ。

助六 知ってるよ。俺も毎年食べてたもん。

浩 そうだ、おまえ、今年も秋祭り、手伝えねえつて言ってたな、コラあ！

助六 わかってる！ごめん！…で、なによ？

浩 あ、そうだそうだ…それがさく今年は、出前、別の店に頼むことに決まったん
だ。うーん…みんながきかねえんだよ。なんか、たまやの味が落ちたつて…。
そつか…。

浩 わりいな…。おれもがんばったんだけどな。青年部長もどうしても！つてさ…

助六 うん…しようがないよ。浩さんのせいじゃない。

浩 というわけだからさ、おまえから、そうアキちゃんに伝えといてくれよ。

助六 やだよそんなよ！

浩 頼むよ！ 今度、「ちゃばれー」連れてつてやるから！

助六 行きたくないから、ちゃばれー。別に。…ってか、自分がおばちゃんに言いづ

らいからって、ずるい！

浩 ほんじゃな！ 頼んだぞ！（電話切る）

助六 ちよつと！…はく（ため息）

第八場

翌月（10/1日曜12時過ぎ）たまやの店内。

近くの神社でお祭りが開かれているらしい。

玄関の外からはにぎやかなお囃子の音や人々のざわめく声が聞こえる。

修二 どうもありがとうございます。またどうぞく

客を送り出して戻ってくる修二。店内にはいづみがいる。

今出て行った客のテーブルの上には、ほとんど手が付けられていない天ぷら。形が崩れていて、油切れも悪い。うどんもどんぶりに残っている。

いづみ

(皿を下げようとして) あーあ、自慢のてんぷらが…

修二

(だまって、食べ残しのてんぷらをティッシュに包み、そっと隠す) さあこれでよしと…下げて。

いづみ

(肩をすくめて) へーい。

町内会の回覧板をもって、たか子が登場。

たか子

こんにちは…

修二

いらっしやい…あ…たか子おばさんか。

たか子

これ回覧板。アキさんは？

修二

今ちようど、裏の畑に、小松菜取りに…

たか子

あらそう…それはいいけど…、ちよつとどうしたのよ。お祭りで町中ごった返してるのに、ここだけは閑古鳥ね。

修二

はい…。このまえ「たべなび」に、味が落ちたってコメントが載って…。それから、ずっとこんな感じですよ。

たか子

たまやのうどんはね、一代目のおじいちゃんの時から有名で、あんたのお父さんの全盛期なんか、毎日、満員御礼だったもんだよ。お父さん：勇一さんがいなくなつたときはもうだめか！と思つたけど、それをアキさんが、女手一つで、根性で立て直したんだ。たいしたもんだよ、あんたのお母さんは…。で、孝ちゃんが大きくなつたら、今度は二人して一緒に、そりや楽しそうに商売やつてたけどさ。その矢先に、今度は孝ちゃんまで亡くなつてさ…。それでも、アキさんは、立ち直つたよ。あんたたちのためにね。近頃じゃ、天ぷらもうまい。出汁も絶品だつて評判でさ、東京からだつて、車で観光客がいっぱい来て…

いづみ

観光客はもうやばいっしょ（だめだの意）

たか子

ねえ、勇一さんからは、まったく連絡ないの？あれつきり？

修二

（首を振る）

たか子

色男だつたからね、あの人、気前が良くて惚れっぽくて…。だけど、あんたたちおいて女と逃げるなんてさ、どうかしてるよ。借金まで残して…

修二

おばさん…（目くばせ。いづみが聞きたくなさそうにしてるからやめての意）

たか子

ああ、ごめんごめん、ついね…でもさ…いつか、ここへ、ひよっこり帰つてくるんじゃないかね？ほんとに優しい人だったんだよ、それにうどん作りだけは

まじめでね、お父さん。

いづみ
：母さんのあの性格じゃ、ダンナに逃げられてもしょうがないでしょ。あたし、父さんの気持ちわかる。

修二
：（いづみをたしなめようとするが、たか子が止める）

たか子
（気分を変えて）それはそうとき、アキさん、病院には通ってるの？

修二
時々：薬はもらいに行ってるようなんですけど。俺たちにはなににも話してくれなくて。

たか子
困ったね…

修二
正直、俺たちもどうしたらいいか、本当にわからないんです。いつもじゃないんですよ。物忘れはありますけど、うどん打ちもちゃんとできる時もあるし。ただ、時々集中力が落ちてなにをやってるのかわからなくなったり…。でも、あまりそのこと強く言うと、かえって悪くなる気がして…

たか子
そういうもんなのよ。うちのお姑さんの時なんてさあ…

修二
俺が作っても、何かが足りないんです。同じように作っているつもりでも…やっぱり母さんのうどんとは違う…

たか子
修ちゃん…

助六が初老の身なりの良い男（峰岸保）を案内して入ってくる。

助六 はいはいどうぞ

峰岸 どうもありがとう。

助六 この人、その辺で食べ物屋探してたから引つ張ってきた。（保に）いや、お客さん、あんたは運がいい。ここのうどん絶品なんですよ。この町に来たら、これを食べなきゃ！

峰岸 そうですか！

助六 さささ、どうぞ。

修二 いらつしやいませ。こちらへどうぞ。（小上がりに促し、おしぼりをだす。いづみからコップをうけとり）お水をどうぞ…（コップを置く）

たか子 そうだ、アキさんに、声かけてこようか？ね…。あたし呼んでくるよ。（と、いいつつ、助六のそばを通り過ぎる際に）でかした！我が息子よ（ささやき、肩をポンポン。玄関の方へ去る）

峰岸 ……いいお店ですね。

助六　メニューはこちらです。

峰岸　ありがとうございます。うん、そうですね…こちらのおすすめはありますか？

助六、修二を見る。いづみとも顔を合わせ、うなづく。

修二　はい。…うちの名物、舞茸うどんはいかがでしょうか？

峰岸　…いいですね。では、それをいただきますしよう。

その時アキが入ってくる。たか子も後についてくる。

アキ　いらっしやい。

峰岸　あ…こちらのおかみさんですか？どうも…（一瞬二人の目が合う）

助六　おばちゃん、お客さん連れてきたよ。

アキ　助六、ありがとう。

峰岸　あの…失礼ですが…あなた…田中アキさんじゃないですか？

アキ　？

峰岸

ほら、アキさん、福岡天神の石田屋デパートで受付嬢されてましたよね?! 私、地下一階で明太売ってた博多の峰岸ですよ! あのころはいろいろな世話になりました。

アキ

ああ…そういうえば…

峰岸

いや、お元氣そうで、なによりです。

修二

母さん?

アキ

ああ、父さんと結婚する前、私がまだ福岡にいた頃の知り合いだよ。

助六

へ〜〜!

たか子

あらまあ。

峰岸

こんな偶然ってあるんですね。

いづみ

とりあえず、うどん作れば?

修二

そうだ。すいません。

アキ

(修二がやろうとするのを制して) いいよ。母さんがやるから。

修二

え…でも…

アキ

いいから。

たか子

修ちゃん。(言おうとする修二を止めて、母さんにまかせてみたら、と目でいう)

アキ　ご注文は？

峰岸　舞茸うどん、お願いします。

アキ　はい。

みんなが心配そうに見守る中、アキは、カウンターに入り手を洗い、真剣な表情でうどんを茹で始める。顔に少し生気が戻っている。修二は、邪魔しないようにそつと手助けする。

助六　あの〜ここへは観光で？

峰岸　まあ、半分遊び、半分仕事、といったところです。

たか子　あの…お仕事っていうのは…

峰岸　これは失礼しました…（名刺を差し出す）

たか子　どうもご丁寧に（名刺を受け取って）へ〜。峰岸コーポレーション。あら社長さん。

外シーンに移る。

商店街で、浴衣姿の裕子が人待ち顔で立っている。
そこに祭り装束の浩が登場。

浩 ごめんね、待った？

裕子 あ、いいえ…私も今来たところですよ。

浩 あの、よかったらこれ（アンズ飴を差し出す）

裕子 わ…アンズ飴！懐かしい！

浩 でしょ。先生、喜ぶと思って…

裕子 ありがとうございます。でも、これから食事に行くのに、これはちよつと…

浩 あ…そうか…（がつくり）

裕子 あ…でも、お祭りですし、まあ…ありがたくいただきます。では行きましょうか。

浩 …ですね！

二人、下手へ去っていく。

明かりが店内に戻る。

うどんが出来上がり、最後に修二が味見して、うなづく。

と、そこへ、祭り装束の浩が裕子を連れてやってくる。

浩　　ちはくつす、アキちゃん。俺たちが食いに来てやったぜい！

いづみ・助六・たか子　　しいく！！！！

いづみたちは、早く座るように促す。アドリブ入れてください。浩もなんだよ？
と言いかけるが、雰囲気を感じて、おとなしくカウンター席に座る。裕子も一
緒に。

アキ　　はい、あがったよ。

修二　　(すかさず運ぶ) 舞茸うどん、おまちどうさまでした。

峰岸　　おお…美味しいそうですね、いただきます。(つゆを一口、じっくり味わう) うん

…美味しいです。

みんな、音を立てずひそやかに拍手喝采。

お互いに小さくガツツポーズやハイタツチをして、喜びを表現。
なんだかよくわからないが、浩たちも一緒に。

峰岸 私は、うどんが大好きでいろいろ食べ歩いていきますけど、こんなに美味しいう

どんを食べたのは初めてです。アキさん、ありがとうございます。

アキ そんなに褒められるほどのもんじゃないけど、気に入ってもらえてよかったよ。
峰岸 このあたりには始めてきましたけど、いい街ですね。

とその時、二人の観光客が入ってくる。

由希美 こんにちは！

助六・たか子・浩 しゅっ！

翠 え？

修二 ああ。すみません！

翠 大丈夫ですか？

修二 もちろんです！いらっしやいませ！…さあどうぞ！…あれ？あの、もしかして

…

由希美 あ！覚えててくださったんですか？

いづみ ああ！…あのふ！…（修二慌てて止める） ZAA

たか子 …なに？「ふ」って？ ねえ、なによ？「ふ」って？

由希美 あ…

修二 いやいや、おばちゃん何でもないです。母さん、前に…え〜と

アキ 確か、春頃、山登りに来たんだったね？

修二 母さん。

翠 はい、そうです。一回来たただけなのにすごいですね！

アキ あたしはお客さんの顔は忘れないよ。

助六 さすがおばちゃん！

由希美 はい、私もあの時のことが忘れられなくて、また「お母さん」に会いに来まし

た。

アキ そうかい。

翠 実は、先月くらいだったかな？

由希美 うん。

翠 「たべなび」見てたら…

修二 あ！…ご覧になったんですね。

翠 ええ…たまやへのコメント、ひどいこと書いてあって、心配してたんです。それもあつたんで来たんですよ。ね！（由希美に）

由希美 うん。

たか子 ね！修ちゃん。こうやって、気にかけてくれるお客さんもいるんだよ。よかつ

たね！

修二 はい！

由希美 それに、今日お不動さんのお祭りだから、たべなびを見てきたお客さんは、大盛無料で、ドリンクもサービスだつてつていうし…

アキ・修二 ……？

翠 三日前、たべなびで告知してましたよ？

アキ 誰が書いたんだよ。

翠 え？

修二 えと…（助六を見る）

助六 うん、実は、おれ。

翠 (助六を見て) あ! 助六さん。 その告知、助六さんがフェイスブックでシェアしてて、いっぱい「いいね」がついてましたね!

助六 だってさ、おれ、おばちゃんやみんなのために、なんとかしたかったんだよ。おばちゃん、相談しなくてごめん。

アキ 助六: あんたは優しいね。

助六 でも、このアイデア最初に思いついたのは、いづみちゃんだよ。

いづみ 助六、いうなっっていった:

浩 いづみ、助六! やるじゃんかよお、ってか、なんでおまえら(助六と翠):

翠 あ、あの後フェイスブックでお友達に: ね?

助六 うん。

浩 なんだよ! 助六こら! おま:

いづみ 浩、声でかすぎ!

修二 あ、すみません(峰岸に)

峰岸 いえ、本当にいいお店ですね。ごちそうさまでした。

修二 はい、ではこちらで(と伝票を差し出す)

峰岸 おや？（内ポケット探り、財布を探すがない）すみません、車の中に財布を忘れてきてしまったようです。ちよつと失礼してとつてきます。（と出ていく）

浩 財布忘れたつて…ずいぶんそそっかしい社長さんだよな。

いづみ 浩だつて人のこと言えないでしょ。

浩 まあな…つて、おいこら！

アキ あら、浩。あんたいつ来たの？

浩 え、今頃？ おれたちはな、アキちゃんがさみしがつてると思つて、うどん

食べに…

たか子 で、こつちの娘（こ）は？

助六 ごわくなんで浩さん、こんな綺麗な女性と一緒になの？

浩 ははっは！ まあな！

修二 神林さん、どうも。

たか子 修ちゃんしつてんの？

修二 時々、うちに食へに来てくれるお客さんで、そこの遠藤病院の女医さん。

裕子 神林裕子です。

たか子 浩、隅に置けないね。

裕子 あ、それは全く違います。私は、ただ……うどんを食べに来ただけなので。

浩 なにいく！ そうなの？ちよつとゆうこちゅあん！

たか子 で、こつちのお嬢ちゃんたち、お名前なんだっけ？

翠 はい、東京から来ました。斉藤翠です。

由希美 私、三枝由希美です。

浩 どうも！ 私は、為永浩といまして……

いづみ それはいいけどさ、あの客、遅くない？

一同 あ……！

その時、車の走り去る音が聞こえる。

いづみ いまの音！あいつじゃない？

修二 まさか？

浩 食い逃げ？

一同 え……！！

たか子 だけど、アキさんの昔馴染みなんですよ？ね、アキさん？

アキ　それが、なんとなく記憶はあるんだけど、顔はよく覚えてないんだよ。

一同　ええっくく！！

浩　くそくあの野郎！

助六　おばちゃん、ごめん！おれがあんな客連れててきたから！

たか子　ロク、あんたその辺見といで！

助六　うん！

浩　ようし、とっつかまえるぞ！（どつと落ち込む修二を見て）おら、修！お前も

来い！

由希美　よかつたら、あたしたちも手伝います！

浩　よし、みんなで行こう！

アキ　まちな、浩。あの人は戻ってくるよ。

一同　…え（一瞬の間）

アキ　いいかい、私は四十年も客商売はやってるんだよ。あの人、うそはついていな

い。こう見えても人を見る目は確かだよ。

たか子　いやだけどき…（みんな、今のアキにわかるはずがないという表情）

その時、戸が開いて峰岸が入ってくる。

峰岸

どうも遅くなってしまつてすみません。(一同、あつげにとられ、顔を見あわせる。) ……どうかなさいましたか？ 実は、あのような美味しいどんを作つてもらつたので、どうしてもお礼をしたくなって、財布を取りに行ったついでにちよつとお土産を買つてきました。酒まんじゅうです。どうぞ召し上がってください。

アキ

(満足げにうなずいて) そうでしたか、わざわざすみません。遠慮なくいただきます。

峰岸

では…(長財布から一万円札を取り出し) これで…おつりは結構です。

アキ

それは困ります。

峰岸

いえいえ、ほんの気持ちです。

アキ

修二。

修二

はい。(レジからきちんとおつりを取り出し) お釣り、九千二百五十円です。

峰岸

これは、失礼しました。とても美味しかったです。どうもごちそうさまでした。

修二 ありがとうございます。また、どうぞお越してください。

峰岸 私は、独り身で身軽なものですから…ぜひまた寄らせていただきます…では。

峰岸 去っていく。

裕子 よかったですね…お客さん、喜んでくださって。

修二 はい、ありがとうございます。それに…食い逃げじゃなくて、本当に良かったです。六ちゃん、おばさん、本当にありがとうございます。

助六 だけど、おばちゃんさすが！すごい眼力だね。

裕子 そうですね、経験に基づいたアキさんの言葉には、重みがありますね。さすがです。

浩 やっぱ、アキちゃんすっげえな！

アキ だろ。だからいっただろ。あたしの目は確かだって。

いづみ どうせ、まぐれだって！

アキ いづみ！

たか子 そういえばアキさん、あの人、独り者だって！

助六　また来ますって！

浩　なに！　俺のアキちゃんを…

助六　なにいつてんすか、浩さん。

アキ　くだらないこと言ってるんじゃないよ！　あたしはうどんが気に入ってもらえれば、それで満足なんだよ。

助六　うん、おばちゃんのうどんはやっぱすごい！　久しぶりに俺にも作ってよ！

アキ　おまえ、うどん好きだからね！　みんなも食べるかい？

浩　あ！　俺たち、うどん食べに来たんだ！　はらへった！

裕子　はい、うどん！　私、楽しみにしてたんです。

翠　あの…私たちもオーダーいいですか？

修二　あ！　すいません、お待たせしちゃって…

由希美　あたし、舞茸うどん！　大盛で！

翠　私は、なめこおろしうどん。

アキ　あいよ。修二手伝つとくれ、いづみも。

みんな久しぶりに大いに盛り上がる。暗転。

第九場

その翌月（11/20 金曜 22時頃） 入沢家の食卓。

里子　で、調子いいんだって！母さん、その客が来るようになってから。

武弘　へへ、なるほど、で、その人、どんな男なんだ？しゅっちゅう来るのか？

里子　うん、なんでも、母さんと同郷の昔馴染みで、明太子から不動産まで手広く商
つてる総合商社のオーナー社長だって。

武弘　峰岸コーポレーション？聞いたこともないよ、なんだかうさん臭いな。

里子　あたしも最初はそう思ったんだけど、みんなの話だと、どうも本物らしいの。
毎週末、ベンツで乗り付けてくるんだって。

武弘　そうか…でもまあ、なにはともあれ、お義母さんの症状が落ち着いたのはよか
ったな。

里子　そうなのよ！物忘れは相変わらずだけど、自信がついたせいとか、だいぶ料理の
カンは戻ってきたし、イライラもなくなってきたみたい。

武弘 それで、お客さんも戻ってきたってわけだな。経営も安定してくれば、修二君

たちも一安心だ。

里子 ねえ、あなた。こういう病気つてさ、精神的なものが大きいのね、あたし改め

て考えちやつた。

武弘 何を？

里子 母さん、なんだかんだいつて、やっぱり寂しかったのね…。父さんが失踪して、

もう二十年だもん。そろそろこれからのこと考えてもいいのかな？つて。

武弘 これから？

だから、次のパートナーよ。

武弘 おいおい！なにいつてんだよ。お義母さん六十だろ？

里子 やだ、あなた、意外と古いのね。最近ざらよ、こういうの。助六の話じゃ、失

踪でもこれだけ時間がたてば、離婚が認められるそうなのよ。独身なんだつ

て！峰岸氏は

武弘 つてことは、お義母さんが、再婚！！えく

里子 子供もいないみたい。その上、資産家でしょ。

武弘 やらしいこというなお前。しかしなあ…よりによってお義母さんが…

里子 だから、恋なのよ。

武弘 恋？

里子 恋は薬よりもよし！よ。そりゃ、正直、あたしだつて複雑だけどね、でも、母さんが幸せなら、それでもいいかな…。

とそこに花音がバンとやってきて、じつと親たちを見ると、複雑な顔でふいつと去っていく。

武弘 おい、声が大きいんだよ。聞こえてたんじゃないか？

里子 いいじゃない、聞こえたつて。お祖母ちゃんだつて女なのよ、恋しちや悪い？

武弘 …悪くない。

里子 ねえ、あなた。もしよ、もし私が認知症になったら、どうする？

武弘 なんだよ、やぶからぼうに。

里子 ねえどうする？ あなた、面倒見れる？

武弘 あたりまえだよ、そんなこと。

里子 ううん、すぐ老人ホーム入れて。迷惑かけたくない。

武弘　　ばか！　そんなことできるわけないだろ！
里子　　なによ、せつかく人が気を使つてんのに…ばーか。

など、二人で「ばーか」「ばーか」と何度か言い争う。と、また花音がくる。

花音　　ばかって言ったら、自分がばかになるよ！

二人　　（顔を見合わせて）

里子　　はい……

武弘　　ごもつとも…

第十場

照明、切り代わり。同日、時半頃。街灯の下

いづみ　　でさ〜この前…

和也　　…

いづみ どしたの？なんか今日ノリ悪いじゃん。

和也 別に。

いづみ あ、またほかの女のこと考えてたんだ？

和也 んなことねえよ。

いづみ うそ。

和也 …おれさ、実家帰るかも。

いづみ …へえ、いつ？

和也 いやそういうんじゃない、もうこっちに帰ってこねえかもしれない。

いづみ …あ…そうなんだ…

和也 うん…俺、金ないし。来月、アパート引き払うことになってさ。仕事もうまく

いかねえし、そろそろ潮時かなって。

いづみ 本気でそんなこと言ってんの？

和也 …まあな。

いづみ ばっかじゃない！まだなんもしてないくせに、潮時って。じゃ何のためにこっ

ち来たんだよ。

和也 そうだけど…実はさ、向こうで、いいチャンスもらえるかもしれないんだよ。

いづみ …ほんとに？

和也 うん、世話になった社長のダチでさ。向こうで新しい会社立ち上げるみたいなのが感じなんだよ。それで、おれもそこに来ないかって。そりゃ最初は見習のカバン持ちだけど。場数踏めば、大きいヤマ任せてくれるってか…チャンスもあるってさ。

いづみ それ確かな話なんだ？

和也 …まあな。

いづみ じゃ、あたしも行こうかな。

和也 まじかよ？だって、今、おまえんち大変なんだろう。いいの？

いづみ さあ…困るんじゃない？ だけど、もういいよ。なんで、あたしがここまで家族の犠牲になって、うちのことやっていかなきゃなんないの。それが当たり前だと思ってるのよ、あの人たち。もうたくさん。あたしにだって、自分の人生があるんだから。

和也 へー、言うじゃん！ …じゃ行っちゃおう？俺と？マジで？

いづみ …うん…

和也 とかいって、本当はそんな気ないよな、お前。

いづみ

わかんない。…ちよつとき、あたしも話あるんだけど…

和也

…なんだよ、悪い話？

いづみ

実はさ…

次の場と切り替わる

第十一場

同日 23 時頃。店のテーブルで小さなライトを頼りに計算し、帳簿をつける修二。計算の仕方がわからず、四苦八苦している。店の通帳を開き、計算。売上げが少なくて、支払いができない。「やっぱり支払いが足りないか…」自分のクレジットカードを何枚も取り出し、並べ、ため息をつく。

途中から、アキが降りて来て階段の陰からそつと様子をうかがっている。暗転。

第十二場

「昼下がりの店内。(11/23 木祝 14時頃) 親しげに語り合うアキと峰岸。
ちようどお勘定をしているところ。」

アキ (伝票を手にして) …ええと…舞茸うどんと天ぷらで…(計算ができない)
峰岸 …七百五十円と七百五十円で…千五百円です。じゃあこれでちようどです。(自

アキ 分で計算して、千五百円を渡す。さりげない気づかい)
ありがとうございます。

峰岸 ああ、美味しかった。ごちそうさま。…アキさん、実は私、来月、二週間ほど、
九州に帰ることになったんです。

アキ じゃあ、しばらくくうどんは食べにこれられないですね。

峰岸 今回は、休暇みたいなものですから、博多だけじゃなくて、長崎やほかのどこ
ろものんびり回ってこようかと思っています。

アキ それはいいですね。

峰岸 命の洗濯です。この四十年間、仕事仕事で夢中で走り回っていましたから、こ
こらで、ちよつと骨休めをしたいと思ひましてね。

アキ それなら、ふるさとに帰るのが一番ですね。

峰岸 アキさんは、里帰りはなさらないんですか

アキ 私は早くに親を亡くしまして、向こうにはもう親戚もいないんです。

峰岸 私も同じです。親兄弟とも死に別れて、いい人にも巡り合えず、気が付いたら、

家族と呼べる人は誰もいなくなつてしまいました。：アキさん、もしよろしかったら、来月、私の里帰りに付き合ってもらえませんか。

アキ あまり、遠出はしないように、子供たちに言われてるんですよ：

峰岸 私が一緒でもだめですか？もしなんなら、修二君たちも一緒に。

アキ あの子たちは店があるから：

：仕事も大事でしょうが、たまには、アキさんたちが背負つてる重い荷物を下ろして、なにもかも忘れてのんびりしませんか。一緒に長崎の海を見て、一緒に美味しい皿うどんを食べて：。そうしたら、アキさんの病気なんて、治つてしまふんじゃないでしょうか。

アキ

峰岸 旅費のことは心配しないでください。私が手配します。

アキ いいえ、そういうわけにはいきません。

峰岸 大丈夫です。：：：アキさん、来週また来ますから、少しの考えてみてくださいませ

んか。お願いします。

アキ ……（かるくうなづく）

峰岸 じゃあまた…（去っていく）

アキ ……

アキ、無言で見送る。ふと振り返ると孝一の姿が。

アキ 孝一…。

孝一 よう、母さん。元気そうじゃない。

アキ そんなんじゃないよ。

孝一 なにいつてんの？ ……なに？峰岸さんのこと気にしてんだろ？

アキ 母さん、あの人とはみんなが言ってるようなことは何にもないんだよ。

孝一 わかってる。

アキ 母さん、今までずっと一生懸命うどん作ってきて…そのことはもちろんずっと自信持ってたさ。だけど、認知になってからは、思うように体が動かなくてね。

孝一 うん。

アキ だから、あの人が母さんの仕事を認めてくれたことがうれしかったんだよ。ただそれだけだよ。

孝一 あくそう。

アキ なんだよおまえ…あ！やきもち焼いてんだろ？（笑）

孝一 なにいつてんだよ。ばかじゃねえの（笑）…俺さ…久しぶりに母さんの笑顔見たよ。

アキ そうかい。

孝一 …九州行つて来いよ。

アキ え？

孝一 あの人の言う通り、たまには重荷下ろして羽伸ばしてこいよ。

アキ 行かないよ。

孝一 なんで？

アキ こんな認知のばあさんが行けるわけないだろ。

孝一 いいじゃん、そんなの関係ねえよ。母さん、今まで一人でふんばってきたんだから、少しは休めよ。旅行ぐらい行つて来いよ。だってさ、母さん、いっぺん

も里帰りしたことないだろ。

アキ　うるさいね！行かないって言ったら、行かないんだよ。

孝一　素直じゃねえな〜

アキ　：

孝一　まあいいや…母さんの好きにすれば？

アキ　：おまえは本当に変わらないね…〔母さんの好きにすれば〕は生前の孝一の口癖だった）

孝一　：そうだな…もう死んでるからな。

アキ　母さんはね、おまえがいればそれで十分なんだよ。ね？孝一…

アキ　アキがふと振り返って孝一を見ると、孝一は消えている。

孝一…（所在なげにあたりみまわす）

暗転

第十三場

11/27月曜、午前中。店内。峰岸がやってくる。静かに雨が降っている。

峰岸 アキさん、突然すみません。ちょっと近くまで来たもんだから。

アキ あら、いらっしやい。

峰岸 今日は食事じゃないんです。アキさんにお話があつて。

アキ どうしたんですか？

峰岸 実は今度、うちの会社で、この近くにアウトレットパークを作る計画があるんです。

アキ …そりやにぎやかになっていいですね。

峰岸 私はねこの町もあなたの店も大好きなんです。この町の良いところは残しつつも、もっと観光客を呼び込んで、活気のある地域にしていきたいんですよ。…アキさん、私に任せてくれませんか？

アキ え？

峰岸 このチャンスに、お店をリニューアルするというのはどうでしょう。

アキ うちの店を？

峰岸 これだけ敷地があるんですから、ビルに建て替えて、一階はうどんと土産物の

店、二階以上はテナントを入れるんです。

アキ はあ。

峰岸 そうすれば、うどん屋も繁盛するし、テナントからは家賃収入も入ります。

修二くんたちの将来を考えたら、今まで通りじゃだめですよ。

アキ でも…それだったら、私たちはどこに住めばいいんですか。

峰岸 もちろん、最上階に、アキさんたちの住まいを作ります。エレベーターもつけ

て…。お孫さんたちがゆっくり泊まれる広い客間もできますよ。

アキ 孫も泊まれるんですか？

峰岸 はい！花音ちゃん喜びますよ。

アキ それは…いいお話ですけど…うちにそんな余裕は…

峰岸 お金のことは私に任せてください。

アキ いえ、それは困ります。

峰岸 アキさん、私はあなたの力になりたい。毎週、ここに通わせてもらって、私は

…なんてゆうか…心のよりどころができたような…やつと我が家に帰ってきて

よったような気持になってるんですよ。まあ、私は、こんなことでしかお返し

できませんから。

アキ 峰岸さん…。

峰岸 詳しいことはこのパンフレットに書いてありますので、あとでゆっくり読んでください。まずは…敷地面積や建ぺい率を調べたいので…この土地の権利書はありますか？

アキ ええと…ちよつと待つてください（小さな手提げ金庫を奥から出してきて、その中から、権利書を出す）これですか？

峰岸 ああ、そうです。失礼します（中を確認する）これなら家賃収入だけで月々四〇五十万は固いでしょうね。

アキ そんなに！

峰岸 はい、正確なところは、これを拝見して調べておきます。

アキ だけど、峰岸さんにそこまでさせてしまつては申し訳ないですよ。

峰岸 気にしないでください。

アキ そうだ、なにか手付けみたいなのが必要なんじゃないですか。

峰岸 いや、大丈夫です。それも私が用意しますから…

アキ （考えて）今、支払いのお金が五十万はある。（目の前の金庫から現金の入った

袋を出し渡す）これ、持っていつてください。

峰岸
いやそれは…

アキ
私の気持ちですよ。

峰岸
アキさん…わかりました。ありがとうございます。じゃあ、いったんお預かりして（土地とお金の預かり証を書いて渡す）…では、月末あたり、正式な契約書を作ってきます。そうだ、アキさん、お天気がよければ、その日、峠の方までドライブに行きましょう。

アキ
…ええ…

峰岸
じゃあ、また連絡します。（帰っていく）

いつのまにか、雨がやんでいる。アキは、店の外まで送っていく。

修二
母さん…（呼びながら出てくる。奥から出てきて）…おかしいな？…母さん…

（店を見回すがいない）でかけたのかな…（テーブルの上の金庫や書類に気づく）あれ…これ？なんでこんなところに？

アキ
…ああ、どうした？

修二 母さん、金庫なんか持ち出してどうしたの？

アキ ああ、今お前にも話そうと思っていたとこだ。峰岸さんの世話でね、ここを建て替えることになったんだよ。

修二 え？…(パンフレットを読む)：後悔しない土地活用？テナント？賃貸経営？？経営じゃないよ、わかんない子だね。この店をビルにするんだよ。それで、月に何十万も入るんだそうだ。

修二 ……？

アキ それで、その手付金を…

修二 手付金って…まさか？(金庫を確認する。お金がない)：母さん、もしかしてここに入ってた五十万、峰岸さんに渡しちゃったの？今月の支払いのお金なんだよ。あれがないと支払いができないじゃないか。ただでさえ足りないのに。支払いの金なら大丈夫だよ。

修二 どういうこと？

アキ 今月足りないだろうってことは、母さんだって察しはついてたよ。その分は母さんの保険を解約して…

修二 だめだよ、それは母さんの保険…(いいかけるのをアキにさえぎられる)

アキ
いいから、母さんの話を聞きな。保険のことも店のことも、母さんだつてちゃんと考えて決めたんだよ。それに峰岸さんは、本当にこの店やお前たちのことを…

修二
ちよつと待つてよ。これ…（預かり証を見て）まさか…（金庫の中に権利書もないことに気づく）土地の権利書まで渡しちやつたの。母さん？

アキ
だつて、峰岸さんが必要だつていうから…

修二
母さん、なんで俺に相談してくれないんだよ。騙されてるんだよ…こんなうまい話あるわけないじゃないか。なんで勝手にこんなことするんだよ。

アキ
勝手に…ここは、父さんと母さんの店だよ、どうしようとしたしの勝手だ。大きな口たたくんじゃないよ。母さんのこと信用できないのかい。母さんがボケてるからつて、お前、ばかにしてるんだろ。

修二
そういうわけじゃないよ。

アキ
いや、そうだよ。一人で外へ出たらダメ、火を使うのもダメ、あれもダメ、これもダメ。いいかげんにしとくれよ！

修二
母さんこそいいかげんにしてよ。こんな大事なこと、一人で決めるなんておかしいつて言つてるんだよ。

アキ よし、じゃあ孝一に、どう思うか聞いてみよう。孝一……ちよつと来て……孝一！

……（二階にむかつて呼ぶ）

修二 （怒りのあまり思わず）兄貴はもう死んだんだよ！十年前に事故で死んだんだ

よ！なんでいつまでも兄貴なんだよ！もう兄貴のことはあきらめろよ！

アキ （大きなショックを受ける）どうして兄さんが死んだなんて言うんだい！あの

子は母さんの大事な子だよ。死ぬわけないだろ……お前はひどい事言うね。

修二 ……俺はさ、母さんの息子じゃないのかよ……なんで俺じゃだめなんだよ。（アキの

肩に手をかけようとする）

アキ さわらないでよ。孝一……孝一……

修二 母さん……この十年間、ずっと兄貴のことばかり見てるだろ。目の前の俺はな

んなんだよ。母さん、俺のことなんか全然見てないだろ。ねえ（肩をつかむ）

アキ ……誰なのよ、あんた……やめてよ……助けて……やめて！誰か！誰か来て！！（パニ

ックを起こしかけている）

修二 母さん……

いづみ （二階から降りてくる）なに？……どうしたの？

アキ （いづみのほうにすがりついてくる）助けて……こわい……こわい……助けて……殺

される。この人に殺される…

後から、降りてきた助六、言葉もなく、その様子を見ている。
暗転

第十四場

その日の午後。店にて。

まだシヨックを隠し切れない修二。部屋の隅でぶすつとした様子のいづみ。電
話をかけている助六。そのそばに付き添う武弘。

助六

はい…はい…ありがとうございます。よろしくお願いします(電話を切る)

おぼちゃんか認知症だつて認められれば、万一、あいつがこの土地をどうこう
しようとしても裁判で勝てる。俺の師匠の高木弁護士が言つてんだから、間違
いないよ。

武弘

やるなー助六君

助六

こう見えても弁護士の卵だよ、エッヘン。詳しい話は書類を見てもらってからだよ。(証拠書類を整え、パソコンで文書をまとめはじめ)

いづみ

…いい歳して、あんな男にちやほやされていい気になってるから、こういうことになるんだよ。母さん。(ぼつりとひとりごちのように)

里子とたか子が二階から降りてくる。

里子

ふう(ため息)

たか子

アキさん、やっと落ち着いて寝たわよ。今、裕子さんがついててくれてる。

里子

修、母さん、こんなに悪くなってるんだったら、ちゃんとあたしたちに言わなきゃダメじゃない。あんたが一番そばにいるんだから。わかってれば、母さん一人にしておかないで、私がついてたのに。

武弘

おい…やめろよ、こんな時に。修二君を責めたってしょうがないだろ。

里子

でも、家族のこと誰だかわかんないって、相当よ。その上、騙されてお金巻き上げられるなんて…

武弘

まだ、騙されたって決まったわけじゃないよ。

里子　でも、自宅の電話も携帯も全くでないでしょ。最悪のことも考えとかなきゃ。

武弘　里子。

里子　あたしは修たちのこと心配して言ってるのよ。…店がつぶれて、一番困るのは

あんなたちでしょ。母さんも母さんよ。昔っから自分だけは正しいって思ってる、周りの人の言うことなんか、まったく耳貸さないんだから。それなのに、いまさら孝一孝一って…今は、この子たちががんばって店と母さんを支えてくれてるのに修がかわいそうじゃない。

武弘　お義母さんは今、普通の状態じゃないんだ。そこは理解しないとイケないよ。

たか子　一昨年死んだ日野のおばあちゃんもそうだったわよ。戦争にとられた次男の話

ばかり言ってたもんね。こういうときってさ…生きてるもんはつらいのよね。ねえ、支払いはどうする？

里子　それは、うちがなんとかしようよ。

武弘　あの、みなさん、心配かけてすいません。でも、これは俺たち店のもので相談すべきことだから。心配してくれんのはうれしいけど、大丈夫ですから…

里子　修。

修二　里姉、もう余計な口出ししないでくれる。結局、俺のこと信用してないんだろ。

助六 ほらほらほら、みんなもう落ち着いてよ！…はい、書類の準備できたよ。とり

あえず銀行。その前に高木先生の事務所。さ、行くよ！

武弘 助六君ありがとう。じゃあうちの車で…さあ修二君。(女性陣に) じゃあ、あと

はよろしくお願いします。(修二、武弘、助六の順で出かける)

助六 (去り際に、女性陣に) 任せて！

たか子 よ！ボケ弁護士！

助六 …っっておいつ！(とか、ひとことなにか和ませてから、去っていく)

女性三人残る。

裕子 (上から降りてきて声をかける) すみません、アキさんの着替えはどちらにありますか？…ちよっと、失禁が…

たか子 (里子に) いいよ、あたしが行くよ。(一緒に二階に上がっていく)

里子 おばちゃん、ごめん。

いづみ (二人つきりになってから) 里姉、あたしここであるから。

里子 はあ？

いづみ 結婚する。

里子 あんた、なにいつてんの？

いづみ こんなうち、もうまっぴら！

里子 ……（言葉に詰まる）

二階から声が聞こえる。

裕子 アキさん、ちょっと待ってください。落ちついて。

たか子 （二階から降りてきて）里ちゃん、アキさん、ここ出ていくって聞かないんだよ。

アキ （階段を降りてきて）里子、いづみ。母さんは、施設に行くからね。

里子 母さん、もうやめて！なんで、そういうこと言うの！

いづみ （微動だにせず、かたまっている）

アキ （構わず玄関に行こうとする）

里子 母さん！

するとアキの前に孝一が立ちふさがる。

照明がアキと孝一だけになる。

アキ 孝一：母さんもうおしまいだ。

孝一 なにいつてんだよ。

アキ これ以上生きてたって、子供たちに迷惑かけるだけだし。：母さんつらいんだよ。そろそろお前のところへ行きたいよ。

孝一 母さん。

アキ 別に絶望して言ってんじゃないさ。みんなによくしてもらって、まあそれなりにいい人生だったよ。：でも、もうたくさんだ。父さんだって、もうこの世にいないんじゃないかね。孝一：母さんを連れていっとくれ。

孝一 だめだ。母さんには家族がいるだろ。

アキ あの子たちだって、母さんが死んだほうが幸せになれるんだよ。

孝一 そんなことねえよ

アキ いいや、そうだよ。いくらきれいなこと言ったって、そのうち、母さんが邪魔になるんだ。

孝一 それ本気で言ってるの？ あいつらが母さんのこと…

アキ 母さん、自分じゃなくなるんだよ…

孝一 全部忘れたって、母さんは母さんだよ。

アキ …孝一…お前のそばに行きたい…（ポケットからハサミを出して、のど元まで持っついていこうとする）

孝一 だめだ！生きなきゃだめだよ、母さん。たとえどんなに迷惑かけたって、何あったって、いやそういう悪い時だからこそ、家族は…人は支えあっていかなきゃだめだ。人生いいときだけじゃない。だけど生きてりや絶対いいことだってある！ …俺さ、向こうで待ってるよ。もうここには来ない。俺がいたんじや母さんはだめだ。今そばにいるあいつらと、母さんはしつかり向き合わなきゃ。

アキ 孝一…。

孝一 さよなら…母さん。（去っていく）

アキ 孝一…どこにいくんだよ…孝一！

孝一 母さん、元気だな…

アキ …いやだよ…孝一！…孝一！（ハサミを取り落とす）

ながり、結果として認知症の進行を抑えることもできません。

たか子 さすが裕子さん、いいこと言うねえ。

助六 だね。

神林 では、私はこれで…なにかあったら、いつでも連絡してください。

里子 何から何まで、本当にお世話になって…

修二 裕子さん、どうもありがとう。

裕子 修二さん、元気出して。ではみなさん…失礼します。

四人 どうもありがとうございました。

裕子 帰っていく。修二、玄関先まで送っていく。

たか子 ねえ里ちゃん、結局、いづみちゃん、出たままなの？

里子 うん…。お茶でも入れようか？ あ、貰いもののお菓子があつたんだ。(お菓子を取りにを奥へ引っ込む)

助六 いづみちゃん…どうしてんのかな…

たか子 心配いらんよ。ああ見えて、あの子意外としっかりしてんだから。…ね、口

ク、勉強はほどほどいいよ。

助六 何言うんだよ、母ちゃん。

たか子 アキさんには、あんた本当の息子みたいにかわいがつてもらったんだから、こんな時こそ役に立たなきゃ。こういう時に、人間の本当の価値つてのがわかるもんだよ。

助六 うん：

修二 (戻ってきている) 大丈夫だよ。

たか子 修ちゃん。

修二 ろくやんはがつつり勉強して、早く弁護士になってよ。母さんだって、絶対そう思うと思う。店のことも母さんの世話も俺がやる。

助六 あたりまえだよ修、おまえがやるんだよ、店も親も。だけど！俺もやる！（修が言いかけるのをさえぎって）おととつ：ちよいまち！：最後まで言わせろよ。だからって言つて、弁護士も絶対にあきらめない！絶対受かつてみせる！：五年目だかね。もうそろそろ、俺の時代だ。

たか子 なーにが俺の時代だ（笑）

里子 (お菓子を持って出てきて) おく、期待してるよ。助六先生！

助六 まかせて！

たか子 里ちゃん、修ちゃんもずいぶんしつかりきたね。

里子 おばちゃん、ありがとう。助六もほんとにありがとう！ これからいっぱい迷惑かけちゃうと思うけど…やっぱりさ、あんなこと言っても、母さんうちにいたいんだと思う。それに、どっか施設に入るってたって、お金もかかるし、そう簡単には入れないのよ。…パートもやめる。ダンナも協力してくれるっていうし…あたし、昼の間だけでも、一緒にうどん屋やる！

修二 ええっ！

里子 なによ？やだっていうの？

修二 いやそういうわけじゃないけど…

助六 さとねえ、料理できたっけ？

修二 いやいや！

里子 なによ、二人してばかにして、主婦をなめんなよ！

たか子 しゅうちゃん、あんたにお嫁さんが来るまでは、里ちゃんががまんするしかないね。

里子 そうよ！…え？おばちゃん！どういう意味？

浩

（入ってきて）ういゝつす！アキちゃんの調子どう？俺さ、プリン買ってきたんだけど、アキちゃん好きだろ？…あれ？なんだよ、人が心配してんの、おまえら楽しそうにしやがって！

そのまま、おっかけっこしたりで、盛り上がるみんな。

暗転

第十六場

商店街の一角。雑踏の音。

色とりどりのはつぴを着て、手にのぼりやうちわなどを持った一団がやってくる。浩を先頭に、修二、助六、武弘。

浩

おら、なにビビってんだ、お前ら。しつかり持って俺についてこい！いいか、店を繁盛させるには宣伝だよ。宣伝するのは、目立たないとダメなんだぞ、わかるか！

助六 それはいいけどさ……なんか、これ違うんじゃない？

修二 うん。このはつぴ、「にじいろクローバー」ファンクラブのだよな？

武弘 そうなの？これが、あの「にじくろ」のかあ！でも、なんで浩君がこれ持ってるの？

浩 はい、自慢じゃあないですけど、俺、実は「にじ色クローバーZ！」のファンクラブ、関東支部副部长なんですよ！ コールにかけちゃ、筋金入りですよ！ え〜！三十五にもなって、アイドルの追っかけやってんの？

助六 すごい！へ〜関東支部副長！ 前から僕もやってみたいと思ってたんですよ、コール！ 実は僕も大ファンで！

浩 なんだあ！武さんもか！ 見どころあるな〜！里ちゃんは、いい婿もらったな！

武弘 あの、僕も今度、ライブ連れてってもらえますか？

浩 うわ〜同志だ！ じゃ、来月のライブ、一緒に行きましょう！

武弘 やった〜！ありがとうございます！

浩 じゃ、今日は、ライブの予行演習だ、気合入れていくぞ！

武弘 おーう！

助六　　なんで、おっさんが、二人で盛り上がってんだ？

修二　　もう、いいから、とにかくやりましょう！

浩　　よし、んじやいくぞ！（客席に向かって大きく）今日〜！われわれはあく〜！
たまや、女将吉村アキを、応援するためにここにやってきたあく〜！ うどんは
俺らのソールフードだ！ アキちゃんは、俺たちのおふくろだあく〜！！ みんなで
食うぞ〜！うどんを〜！ それ！「俺らが支える、アキリン」！はい！

武弘　　「俺らが支える、アキリン」

修・助　　…へ？

浩　　もつと、腹から声出せ！

武弘　　「俺らが支える、アキリン」！

浩　　おーし！「みんなのおふくろ、アキリン」！はい！

武弘　　「みんなのおふくろ、アキリン」！

浩　　なんだなんだ、おまえら！勇気がないなあ〜、まずはその羞恥心を捨てろ！

武弘　　そうだよ、修二君、助六君。一回やってみると、案外吹っ切れるもんだよ！

二人　　：

浩　　おっしやく「絶対アイドル、アキリン」！

三人 「絶対アイドル、アキリン」！

浩 「笑顔が一番、アキリン」！

三人 「笑顔が一番、アキリン」！

裕子 (やっつけてきて) ちよっと、みなさん、なにやっつけてんですか？

修二 あ、裕子さん！

助六 よかった！助けて、浩さん止めて、裕子さん！

裕子 そんな、気の抜けたコールじゃ、人は魂を揺さぶられないんです。もっとハン

グリーに！もっとドラマティックに！（さらに、面白いコールとかをやっつけてください。そして四人も一緒にやろうとすると）

たか子 (そこにやっつけてきて) なにをあほなことやっつけてんだよ！

修二 たか子おばさん！

助六 よく来てくれた母ちゃん！

たか子 あたしだって、負けてないよ。よくし行くよく！（などの掛け声とともに、曲

「恋」が入り、パフォーマンス）

そこへ、里子がかげこんでくる。

里子　ねえ！どうしよう…ちよつと目を離れたすきに、母さんがいなくなっちゃった！

里子を除く全員　ええっ！！

第十七場

浩　（上手からでてくる）アキちゃん！アキちゃん！（舞台下手から助六とたか子が出てくる）おう、どうだ？

助六　だめ：花音の学校の方も、公園も探したけどいない。

浩　商店街の中は、町会の連中に手分けして探してもらってるからな！駅はどうだ？

たか子　武弘さんが行ってるよ！今んところ、電車には乗ってないみたい。

浩　よし！

裕子　病院から、包括支援センターにも連絡入れてもらいました。

修二　ありがとうございます…それから、警察にも連絡したんだけど…あとはどうした

らいいか…

浩 大丈夫だよ！ これだけみんな探してんだから、きっとアキちゃんは見つか
る！

里子 浩！ 今、酒屋の五郎ちゃんから電話があつて、母さん、峠の方角に行くのを
見た人がいるって！ 今、武に頼んで、車で先に行ってもらってる。
浩 山かあ…ますいな…。よし、みんなでいくぞ！

ふと振り向くと、そこに武弘とアキの姿が。裸足で、上着も着ないで、寒そう
な様子。

修二 母さん！

アキ ……。

里子 武…

武弘 今、山に向かう途中で見つけたんだ…

全員 (声をかけようとするが、急に大声を出すと逃げるのではと思い、声が出ない)
助六 (そつと近づき、優しく声をかける) おばちゃん、よかった、帰ってきて…

アキ

(突然、号泣する)

みんな、そっと近づき、温かくアキを囲んでいく。

暗転。

第十八場

暗い中にアキの歌声が聞こえる。「うさぎおーいしかのやま、こぶなつーりしかの川」「故郷」である。

やがて、ぼんやりとした明かりの中、夜中。暗い店内に、ふらふらと入ってくるアキの姿。歌いながら、厨房に入っていく。てんぷら鍋に火をかけて、一人でてんぷらを作ろうとする。歌が止まり、しゃべりだす。

アキ

…はいっ、野菜天一ちよう…ほら…ぼやっとするんじゃないよ、しゅうじい…

(てんぷら鍋から、うつすらと煙が立ち始めるが、アキは気が付かない)

修二

(入ってくる)そこにいるの、母さん?…どうしたの?なにやってるの?

アキ なにをって、天ぷらに決まってるだろ。お客さんお待ちだよ。(ボールにてんぷ

ら粉を入れて混ぜているが、中は卵の殻だらけ、ぐちゃぐちゃ)

修二 ……母さん、俺がやるよ。

アキ いいんだよ、もうできるから…。(ますます温度が上がってくる、あぶない!!)

修二 (おどかさないうちに) あ、か、かあさん…お客さんが何か呼んでるよ、ちよ

つと来て…お願い、こつち来て!

アキ なんだよ…しょうがないねえ…(火のそばを離れて、修二の方に行こうとする

が、その瞬間、加熱した鍋から、赤い炎をが、フワツと立ち始める。

修二 母さん、危ない! (間一髪、アキを抱きとめる)

アキ 修二…(なにごともしなかったように修二に腕に抱かれて、にこにこしている)

修二 母さん、こつち、こつち来て! (そのまま、玄関の外に転がりです) ろくやん!

早く逃げろ! 火事だ! 火事だ! 誰か来て!!!!

人々のざわめき、怒号、消防車の音などが沸き上がる中で、暗転していく。

第十九場

店の中。椅子やテーブルは、端に片付けられ、焦げたであろう厨房には、あちこちにブルーシートがかけられている。

里子、助六、たか子、花音が入ってくる。

たか子

ボヤで済んだんだから、不幸中の幸いだったね。

里子

ほんと…おばちゃん、いろいろ世話になって、ありがとう！ほんとに助かったわ。

たか子

ううん、しゅうちゃんがよくがんばったのよ。それに比べて、うちのボケ息子は…

助六

最近、早寝早起きにサイクル変えたもんだから、もうぐつすり…面目ない！

里子

そんなことないわよ、助六も、けががなくなかって本当によかった、ね、花音。

花音

うん。

浩

(入ってきて) おう！アキちゃんたち帰ってきたかあ？

里子

浩！いろいろ心配かけてごめんね！

浩

なにいつてんだよ。…おれさ、孝一の代わりだと思ってやってんだ。孝一、先

に行っちゃって、どんなに家族のこと心配だったか、どんなに心残りだったか、俺には、痛いほどわかるから。

里子
ありがとう！ 浩…

その時、車の音。修二とアキが、武弘の運転する車で病院から帰ってくる。裕子も一緒。アキは、修二にだっこされている。二人とも、手や足などに少し包帯がまかれ、ばんそこうが貼られている。痛々しい様子。アキは、山茶花の花を一枝、大事そうに持っている。

助六
おばちゃん！

たか子
アキさん！

花音
おばあちゃん！

浩
アキちゃん（みんな同時に）

修二
ただいま。

浩
おい、アキちゃん、どうしたんだよ、なあ？やけどひどいのか？

修二
いえ、ちよつとショックで疲れてるだけですから…、今だけです。さあ、つい

たよ、母さん。(修二、椅子の上にあきを下す)

アキ　まあまあ、どうも御親切に、ありがとうございます。

里子　…おかえり、母さん。

アキ　はい、ただいまあ…

里子　…この花？

修二　病院の花壇に咲いてたのをどうしてもほしいってんで、一枝もらってきた。

たか子　アキさんこの花…さざんか大好きだったもんね。

里子　そうか…父さんの花だ…(修二と顔を見合わせる)

花音　アキちゃん。お花、きれいだね。

アキ　はあーい(笑う)

武弘　(鞆を持ってあとから入ってくる) 修二君、ここに置くよ。

修二　あ、すいません、義兄さん。

里子　どうだった？

武弘　うん、軽いやけどと擦り傷とが少し。今のところはまあ異常ないだろうって。

念のため、詳しい検査をした方がいいって言われたんだけど、お義母さんが一度、うちに帰りたいっていうから。

里子　そつか。…裕子さんもありがとう！本当にお世話になって

裕子　いえ、大事にいたらなくて、本当に良かったです。（アキのそばにひざまづく）
アキさん…

アキ　はいよ

裕子　表情はしっかりしてるし、大丈夫です。…でも、アキさんをこんな危険な目に
合わせてしまつて…私の治療方針では、まだまだ足りないところがあつたと、
大変申し訳なく思っています。もう少し気を付けていればよかつたんです。ア
キさん、みなさん本当にごめんなさい。

武弘　そんなことないですよ。僕たちも甘かつたんです。夜は、修二君一人に、お母
さんを任せてしまつて。僕か里子がついてるべきだつた。

裕子　私も迂闊でした。で…これからのことですが…。とりあえず、店のかたづけが
終わつて、けがが治るまでは、検査もありますし…、少しの間ですけど、病院
でお世話にさせていただきます。

修二　ありがとう、裕子さん。

里子　…まつたくもう、まさか火事になるとはね（笑）…笑い事じゃないけど。
夜中まで天ぷらしてたなんて、働き者のアキさんらしいじゃないの！

たか子

修二
です。

浩 アキちゃん…世話が焼けるよなく(笑) よし！これからは毎日、病院行って、

思いっきり笑かしてやるか！

裕子 え！病院で騒ぐのはちよつと…

助六 裕子さん、冗談だつて。

みんな、和やかな笑い。

武弘 あの、実は…、先日、会社から、転勤の内示が出たんです。

たか子 転勤つてどこ？

武弘 東京です。

助六 東京！

武弘 でも、今回は辞退させていただくことにしました。うちの事情を上司に話したところ、気持ちよくわかってくれて、了解いただきました。

里子 いいの？本社行かなくて…お義母さん楽しみにしてるんじゃないの？…

武弘 うーん…先のこととはわからないけど…でも今はね！僕もここにいたいんだ

よ。後悔したくないから。たとえどんなに出世したとしても、それとこれとは、やっぱり別なんだよ。もしこういう時、僕たちがそばにいたら…って後悔しても遅い。里子にもそういう後悔させたくないから。

里子
あなた。

花音
パパ！かっこいい！

一同、穏やかな笑いに包まれる。

花音
アキちゃん、ケガがちよつとでよかったね！

アキ
はーい（ニコニコ）

修二
母さん、お腹すいただろ？

その時、玄関から、バタバタと音がして、いづみが飛び込んでくる。

いづみ
母さん！（アキに飛びついてきて）母さん！ 大丈夫！ごめん！ごめんね〜！

（ずっとそう言いながら、おいおいなきだす）

里子 いづみあんた、どうして、火事のこと知ってるの？

いづみ 修兄から聞いた。

里子 なんだ、しゅう、あんた知ってたの！いづみの連絡先！

修二 うんまあ…

いづみ あたし、ぞっとした。もしこのまま母さんが死んじゃったらと思うと、修兄や

みんなが、もし死んじゃったらと思うと…なんであたしがついていて助けられなかったのかって、もう腹が立って、自分が情けなくて、あたしも死んじゃうかと思った。いやだ！もう…誰かが死んじゃうのはやだ！…あたし、こんなに後悔したの生まれて初めて。もしかしたら…母さんも、そうやってずっと孝兄のこと後悔してたのかなって思って…やっとなかった…母さん、ごめん…

修二 いづみ。

アキ …（優しくいづみの頭をなでる）だいじょうぶ…なくんじゃないよお…どうした…こわい夢見たか？ずっと母さんがそばについてるからね…母さんが抱っこしてあげるよ…。

里子 母さん

アキ …（修二にむかって手を伸ばし）しゅうじ…しゅうじ…

修二
（思わずアキの手を握る）

アキ

（ふと正気に返る） おまえにはすまなかつたね…知ってたよ。いつか東京で、立派な板前になりたかつたんだろ…ね…おまえは…孝一が死んだとき、おまえ、黙ってあきらめてくれたんだよ…母さんのために…ごめんね、母さんが悪かつたね…

修二

違う！そうじゃないよ！母さん、俺が選んだんだ。そりや最初は、東京でやりたかつたよ。だけど、ここでうどん屋になってみて、それがどんだけすごいことか、わかつたんだ。母さんや兄貴がやってたことが…。絶対につぶさないよ、たまやは。何年かかっても、ここを元通りに直す。それで、もつともつと、俺がでっかい店にして、いつか母さんや兄貴や親父を追い越す。だから…

その時、玄関のあたりから、大きなすすり泣きが聞こえる。金髪のヤンキー風の若い男が背広姿で、そこにたたずみ、涙に暮れている。

浩

そこでなにやってんだよ？ おまえだれだ？

和也

(涙をぬぐって) ああ、すいません！なんか話に入りそびれて…えと、俺…じやなくて、わたくしは…

いづみ

あたしのダンナだよ。

全員

え!!!

和也

あ、小泉和也と申しますです。はじめまして…このたびは、大変申し訳ありませんでした!! (大謝り)

全員

(啞然)

和也

実は俺、いろいろありまして…急に仕事で大阪に行くことになってしまいました…。だけどこいつ…じゃあなくていづみさんち、大変なのはわかっていたんで、結婚しよう、って、なかなか言い出せなかつたんです…。で、ある日意を決してプロポーズしたら…間が悪くて、それがよりによって、お義母さまがおボケになった日の前の日で…。

武弘

おボケって?…

いづみ

つまり、母さんがあいつに騙されて金をとられた前日だったんだよ、言われたのが。で、あたし、ソッコーOKしちゃったし。やっぱやめるともいえないだろ。…しよがなかつたんだよ。あたしの腹ん中はガキもいたし。

里子 ガキって！まさかあんだ！

いづみ ……うん。ほら（お腹を指さす）

助六 ええっ！

和也 そうなんです。それで、とにかく一緒に暮らそうって話になって…。もちろん、いづれあらためて、ちゃんとご挨拶に来るつもりだったんです。だけど、いづみが「母さんは今それどこじゃない！」っていうし、俺の方もごたごたしてて…早くうかがうつもりがこんなことになりました。

助六 あー！！どつかで見たと思ったら、あんだ、この間C-1グランプリで優勝した「はちみつ超殿堂」のカズシーザーじゃない？

和也 はい…実はそうなんです。やつと目が出たところで。

武弘 あー…ほんとだ！僕、結構好きなんですよ！「はちみつ超殿堂」いやあ、本物だ。

里子 はちみつ超電導？なによそれ？

花音 ママ知らないの？今、大ブレイクしてるんだよ。この前、Pさまに出てたじゃない。

里子 え？そうなの？なんかちよつとやってよ。

和也 (なにかネタやってください)

里子・たか子 ああ！これね！

たか子 ああ、芸人さんじゃしようがないわね。ま、いろいろあるわけだ。

和也 そうなんです、事務所からも、今は大事な時期だから、スキャンダルには特に気を付けるようになって、きびしく言われてましたから。でも、もう大丈夫です。

事務所にも、結婚のことすっかり了解もらいました。

助六 なんか複雑だな…いづみちゃんのダンナがあのカズだなんて。おれ、なんかさ、いづみちゃんと俺は、いつか結ばれるんじゃないかって、子供の頃から、ひそかに思ってたんだけどな。

たか子 まったくの勘違いだったってことだね…

いづみ ごめんなさい。

助六 いや、とづくにわかっていたよくだめだってことは。好きとかそういうんじゃないや。…なんか今はさ、妹をとられたみたいない気分なんだよね。うん。…いづみちゃんおめでどう！ なあ、修？

修二 うん。…いづみ、和也さん、おめでどうございます！どうか幸せになってください！

和也
ありがとうございます！

いづみ
ありがとう！

修二
こっちへ。(アキの方へ促す) 母さん、いづみ好きな人ができたんだって。すごいだろ。

和也
初めまして、おかあさん！ 小泉和也と申します。俺、絶対、いづみさんを世界で一番幸せにします！だから…お願いです！ 俺にお嬢さんをください。(はっぴばーすでいとうーゆー) (ベースデイソングを小さく口ずさんでいる)

アキ
母さん？

修二
楽しそうね！お誕生会のこと思い出してるんじゃない？

一同、和やかな笑い。

里子
いづみ、こっち座んなよ。今、何か月？

いづみ
うん…もう六カ月かな…

里子
そっかあ…おめでどう！ 母さん、絶対喜んでるよ！

いづみ
うん…ありがとう…

みんな口々に、祝福の言葉を言う。

その時、さわやかな風が玄関の方から吹いてくる風情。

(イメージです、あくまで)

藤村勇一

ごめんください。

修二

はい…え！

そこには、一流企業の秘書といった感じのスマートな若い男、藤村勇一が立っている。眼鏡をかけているが、孝一によく似ている。

いづみ

あれ？

里子

孝？(以下、みんな同時に)

たか子

こうちゃん！

助六

孝兄！

浩 孝一！

みんな、あまりにも孝一に似た男の登場に驚き、固まってしまう。
アキは眠ってでもいるのか、静かに目を伏せている。

藤村 あの…？…こちらは「たまや」さんですよね？…私は（名刺を出す）

修二 （受け取り）藤村勇一…

いづみ （里子と二人で二人で名刺を覗き込んで）藤村…勇一？

里子 あ…峰岸コーポレーション？（顔を見合わせる）

藤村 はい、私は峰岸保の秘書をしております藤村勇一と申します。今日は皆さんにご迷惑をおかけしたお詫びとご報告に上がりました。

たか子 お詫びって？

藤村 実はですね、峰岸が昨年十一月、こちら様を訪問した帰りに、脳こうそくで意識を失い…そのまま亡くなったのです。

全員 えっ！…（息をのむ）

助六 …それで連絡が取れなかったのか！

藤村

少し時間がかかってしまいましたが、ようやく故人の仕事関係の整理がつき、それで、こちら様から権利書とお金をお預かりした経緯もわかりまして…。こうしてお返しに上がったというわけなんです。

修二

そういうことだったんですね…。

藤村

お返しするのが遅くなり、大変申し訳ありませんでした。では…（鞆から封筒を取り出し）これがお預かりした五十万円と土地権利書です。ご確認ください。あ、はい（兄弟三人で確認する）間違いないです。

修二

それと、実は…、峰岸社長は、遺言で、吉村アキさんに財産の一部を残されました。こちらを…（封筒を渡す）どうぞごお受け取りください。

修二

（小切手を出してみても）ええっ？！

里子

（覗き込んで）一千万！（武弘にふる）

武弘

いやあ…そんな大金…

藤村

社長は、ここに來ることができて、皆さんの温かさに触れて、生きる意味を取り戻したと、とても感謝されていました。アキさんのことも、すいぶん心配されていたらしく…お店のリニューアルについても、綿密な計画書が残されています。

浩 　　つてことは…

助六 　嘘じゃなかったんだ！！

里子 　　しいー！！

藤村 　いや、疑われるのはごもつともです。その後何の連絡もせず、さぞご心配されたことでしょう。誠に申し訳ありませんでした。

修二 　　いえ、とんでもないです。

武弘 　　しかし…これは…本当に義母がいたでいてよろしいんですか？

藤村 　　はい、故人の遺志です。それに社長の本当に天涯孤独の身でしたから、安心してお受け取りください。

いづみ 　　…人見る目、確かだったんだね。

里子 　　え？

いづみ 　　母さん。

修二 　　そうだ。やっぱり、母さんが正しかったんだ。

里子 　　そういうことか。

助六 　　なんにしてもよかったね！これで店が直せるじゃない！

浩 　　だな！

そうだそうだ！とみんな大喜び。

浩 それにしても、よく似てんなく（藤村に）

藤村 （怪訝そうにする）

たか子 この子たちの死んだ兄さん、アキさんの長男にあんたそっくりなんだよ。

藤村 …（無言）

たか子 他人の空似とはいえ、こんなことつてあるんだね！

藤村 アキさん。お噂は、峰岸から聞いています。（と、アキに歩み寄り）どうぞよろ

しくお願いします。（握手するように手を出す）

みんながじつと見守る中、アキはふつと目を開け、笑顔で傍らにあった山茶花の花をゆつくりと勇一の手に渡す。

和やかな笑いに包まれる中、最後にアキの姿のみスポット。

音楽がかぶさっていく。